

上峰町文化財調査報告書第19集

堤六本谷遺跡Ⅲ
堤三本松遺跡Ⅰ
堤三本柳遺跡Ⅰ

平成7～9年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月

上峰町教育委員会

つつみ ろっ ぽん だに

堤六本谷遺跡Ⅲ

つつみ さん ぽん まつ

堤三本松遺跡Ⅰ

つつみ さん ぼん やなぎ

堤三本柳遺跡Ⅰ

平成7～9年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

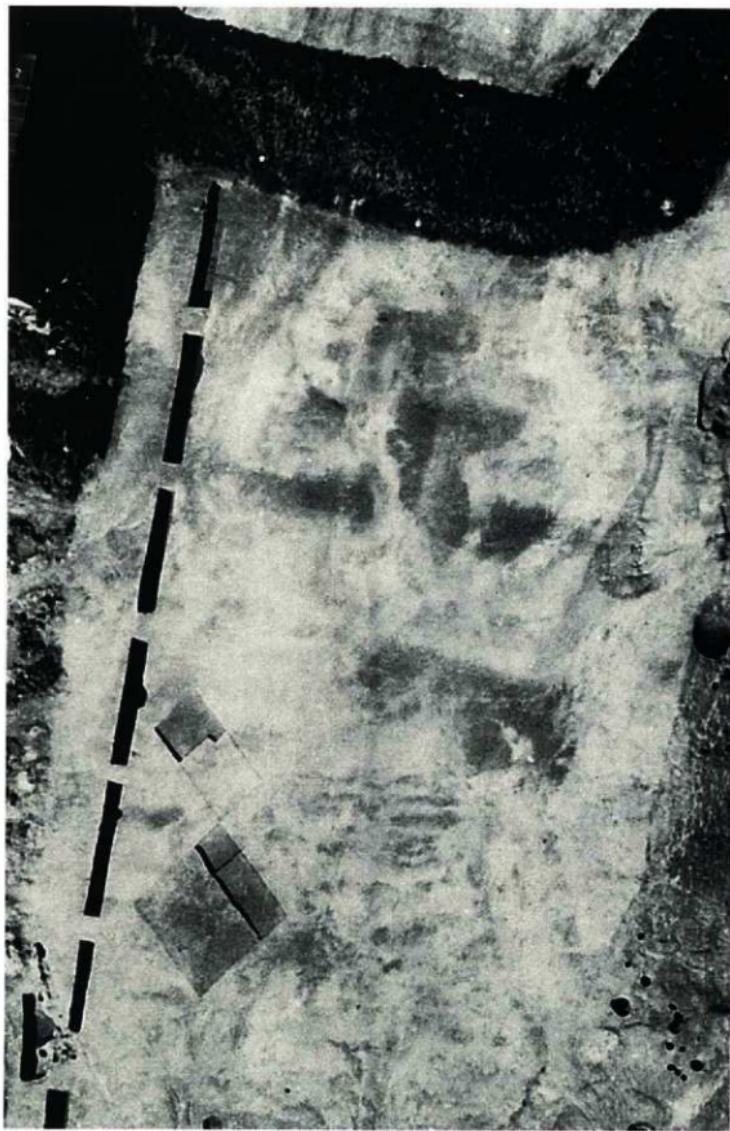


2001年3月

上峰町教育委員会



堤六本谷遺跡10区全景（西から）



堤三本松遺跡 1 区全景 (写真上方が北西)



堤三本柳遺跡 2 区全景（写真上方が北）



堤三本柳遺跡 2 区 ST-013 (写真上方が北東)

序

従来、上峰町は「遺跡の宝庫」と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらには明海へと続く沖積平野と変化に富んだ地形を含む町域には、いたるところに先入たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めてまいりました。

この報告書は、平成7年度から平成9年度に実施した堤六本谷遺跡、堤三本松遺跡、堤三本柳遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。これらの遺跡の調査では、奈良時代の造構や遺物を中心に縄文時代から近世に及ぶ人々の暮らしの跡が発掘されました。堤六本谷遺跡では、奈良時代の集落の跡が検出され、また、堤三本柳遺跡では、古墳時代の墳墓が出土するなど、これまで比較的資料の少なかった山麓部で当時の社会を解明する上で欠かせない貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また住民の共有の財産として、文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力をいただきました文化庁、佐賀県教育委員会文化課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成13年3月

上峰町教育委員会

教育長 古賀一守

例　　言

1. 本書は、平成7年度から平成9年度の佐賀県農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が国庫補助事業により発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳に所在する堤六本谷遺跡、大字堤字一本黒木に所在する堤三本松遺跡、大字堤字三本柳に所在する堤三本柳遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成12年度佐賀県農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業として、国庫補助事業により上峰町教育委員会が作成、刊行したものである。
3. 発掘調査は、平成7年度から平成9年度の農業基盤整備事業の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について年度ごとに便宜的な調査区域を設定し、実施したものである。
4. 各年度の調査遺跡名・調査地区名・調査面積・調査期間は、以下のとおりである。

年　度	遺跡名	調査地区名	調査面積	調査期間
平成7年度	堤六本谷遺跡	10区	3,250m ²	平成7年4月17日
				平成7年8月30日
平成8年度	堤三本松遺跡	1区	625m ²	平成8年7月31日
				平成8年12月3日
平成9年度	堤三本柳遺跡	2区	1,875m ²	平成9年10月21日
				平成10年2月5日

5. 現場での遺構実測作業は、平成7年度、8年度、9年度いずれも有限会社郷土文化財サポートシステムに委託した。
6. 遺構の個別写真及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。また、気球による遺跡の全景などの空中写真撮影については、平成8年度を除き、有限会社空中写真企画に委託した。
7. 調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、隨時、上峰町文化財整理事務所にて実施した。
8. 本書中の挿図・実測図の作成、拓本、トレイス作業などは、調査員の指示により、製図作業員が行った。
9. 本書の執筆・編集は、原田大介が行った。
10. 本報告書に係る発掘調査で出土した全ての遺物、及び図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1. 遺跡の略号は、堤六本谷遺跡が「TTR」、堤三本松遺跡が「TSM」、堤三本柳遺跡が「TSY」であり、調査区の略号は、平成7年度の堤六本谷遺跡10区を「TTR-10」、平成8年度の堤三本松遺跡1区を「TSM-1」、平成9年度の堤三本柳遺跡2区を「TSY-2」とした。
2. 遺構番号は、遺構の種別を表す2文字のアルファベットに続き、調査区ごとに001、002などの3桁の番号を組み合わせて表記した。
SH……堅穴式住居址 SB……掘立柱建物址 ST……古墳 SK……土壙 SD……溝跡・溝状遺構
SX……性格不明遺構・その他
例) SH-001 1号堅穴式住居址 SK-015 15号土壙
3. 指図中の方位については、全て座標北を基準としている。
4. 表中の数値に付した記号について、() は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表している。
5. 土器実測図の縮尺は、原則として1/4であるが、土器拓影など、同一図版内で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号の後に続けてその縮尺を特記している。
6. 土器実測図中のスクリーン部分は、赤色塗彩を表す。同図中のヘラ削り調整痕に付した「↑」印は、調整に用いたヘラ状工具の器面に対する相対的な移動方向を表している。
7. 遺物実測図の遺物報告番号は、調査年度ごと、遺跡ごとに一連の番号を付した。また、この番号は、遺物写真図版の遺物報告番号と一致する。

調査組織

平成7年度		調査組織			
調査事務局	総括	野江	上峰町教育委員会	教育長	
事務主任	口頭典雄	大介	タ	教育課長	
経費執行	白浜博己	二	タ	社会教育係長	
	鶴田浩二	二	タ	社会教育係	
	原田大介	二	タ	タ	タ
調査組織	調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係	
調査指導		原田大介	タ	タ	
平成8年度		佐賀県教育委員会文化財課			
調査事務局	総括	野江	上峰町教育委員会	教育長(～平成8年10月20日)	
事務主任	口頭典雄	江頭典雄	上峰町教育委員会	教育長職務代理者(平成8年10月21日～平成8年11月20日)	
経費執行	鶴田浩二	江頭典雄	上峰町教育委員会	教育長(平成8年11月21日～平成9年1月4日)	
	古賀賀一守	江頭典雄	上峰町教育委員会	教育長職務代理者(平成9年1月6日～平成9年2月5日～)	
調査組織	調査員	原田大介	守	タ	タ
調査指導		鶴田浩二	雄	タ	タ
平成9年度		鶴田浩二	大介	タ	タ
調査事務局	総括	古賀賀一守	上峰町教育委員会	教育長	
事務主任	江頭典雄	大介	タ	教育課長	
経費執行	鶴田浩二	二	タ	文化係長	
調査組織	調査員	鶴田浩二	大介	タ	文化係
調査指導		鶴田浩二	二	タ	文化係
	佐賀県教育委員会文化財課				

発掘作業参加者

平成7年度

秋山キミ、秋山ユキエ、秋山ヨシエ、石橋テル、石丸富男、石丸ミチエ、福員シヅ子、福員トシエ、福員春雄、江頭晴次、江越栄子、江越晋、江越清太、大石貞義、大坪弘子、大坪光代、大坪ミヨコ、蒋方中、蒋方ツタエ、蒋方マツヨ、川原ツヤ、川原ミヨ、久佛衣江、後藤セツ子、最所和子、執行一水、執行ミハル、島四郎、高島昇、武廣ハル子、田中ミスエ、鶴田エミ子、鶴田馨、鶴田キヨ子、鶴田末友、鶴田久子、鶴田八重子、豊福政子、福島一雄、福島ツタエ、藤井妙子、藤戸道子、古川シマ子、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸信子、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸辰夫、矢動丸信子、山下保子、山田瑞穂、吉田英子(発掘作業員)、大隈弓子、島美保子、田尻祐子、馬原喜美子、矢動丸洋子(製図作業員)

平成8年度

秋山巖、秋山ユキエ、秋山ヨシエ、石橋テル、石丸ミチエ、大坪光代、大坪ミヨコ、川原ツヤ、川原ミヨ、久佛衣江、執行ミハル、島四郎、田中ミスエ、藤戸道子、古川シマ子、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸信子、山田瑞穂(発掘作業員)

大隈弓子、島美保子、田尻祐子、馬原喜美子、矢動丸洋子(製図作業員)

平成9年度

秋山キミ、秋山ヨシエ、石橋テル、石丸富男、石丸ミチエ、江口照代、江越晋、大石貞義、大坪光代、大坪ミヨコ、蒋方ツタエ、川原ミヨ、北島光男、久佛衣江、後藤セツ子、最所和子、執行一水、執行ミハル、志波正千、高尾マツヨ、高島ハツネ、武廣ハル子、田中ミスエ、田中豊、鶴田馨、鶴田キヨ子、鶴田末友、鶴田八重子、福島一雄、福島ツタエ、古川シマ子、松尾キミエ、松尾トシエ、馬原喜美子、三好スエ、矢動丸五十三、矢動丸喜三、矢動丸信子、山田瑞穂、吉田英子(発掘作業員)

大隈弓子、島美保子、田尻祐子、矢動丸洋子(製図作業員)

整理作業参加者

岩下貴子、大坪麻理子、坂本恵子、島美保子、早田美智子、田尻祐子

目 次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

I. 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置.....	1
2. 歴史的環境.....	1
II. 調査に至る経緯	7
III. 平成 7 年度堤六本谷遺跡10区の調査	9
1. 堤六本谷遺跡と調査区の概要.....	9
2. 調査の経過.....	9
3. 遺構.....	11
(1) 竪穴式住居址.....	11
(2) 掘立柱建物址.....	14
(3) 土壙.....	15
(4) 溝跡.....	17
4. 遺物.....	18
IV. 平成 8 年度堤三本松遺跡 1 区の調査	22
1. 堤三本松遺跡と調査区の概要.....	22
2. 調査の経過.....	22
V. 平成 9 年度堤三本柳遺跡 2 区の調査	24
1. 堤三本柳遺跡と調査区の概要.....	24
2. 調査の経過.....	24
3. 遺構.....	24
(1) 古墳.....	25
(2) 掘立柱建物址.....	28
(3) 土壙.....	28
4. 遺物.....	33
VI. まとめ	38

挿図目次

Fig. 1 上峰町北部地形概略図 (1/10,000)	2
2 堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡の位置および周辺遺跡 (1/50,000)	4
3 堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000)	10
4 堤六本谷遺跡10区遺構配置図 (1/500)	12
5 堤六本谷遺跡10区堅穴式住居址実測図 SH-008・SH-009・SH-015・SH-026 (1/80)	13
6 堤六本谷遺跡10区掘立柱建物址実測図 SB-021・SB-022・SB-030 (1/80)	14
7 堤六本谷遺跡10区土壤実測図(1)SK-002～SK-004・SK-006・SK-007A・SK-007B・SK-007C・SK-010・SK-013・SK-014・SK-016・SK-017 (1/60)	16
8 堤六本谷遺跡10区土壤実測図(2)SK-018・SK-020・SK-027～SK-029 (1/60)	17
9 堤六本谷遺跡10区出土遺物実測図(1) (1/4)	19
10 堤六本谷遺跡10区出土遺物実測図(2) (1/4)	21
11 堤三本松遺跡1区調査区全体図 (1/400)	23
12 堤三本柳遺跡2区遺構配置図 (1/400)	25
13 堤三本柳遺跡2区古墳実測図 ST-013 (1/100)	26
14 堤三本柳遺跡2区古墳石室実測図 ST-013 (1/60)	27
15 堤三本柳遺跡2区掘立柱建物址実測図 SB-008 (1/80)	28
16 堤三本柳遺跡2区土壤実測図(1)SK-001～SK-007・SK-009・SK-012 (1/60)	30
17 堤三本柳遺跡2区土壤実測図(2)SK-014～SK-018	31
18 堤三本柳遺跡2区土壤実測図(3)SK-019～SK-024A・SK-024B・SK-028 (1/60)	32
19 堤三本柳遺跡2区出土遺物実測図(1) (1/4)	35
20 堤三本柳遺跡2区出土遺物実測図(2) (1/4)	36
21 堤三本柳遺跡2区出土遺物実測図(3) (1/4)	37

表目次

Tab. 1 農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査協議一覧 (平成7年度～9年度)	8
2 堤六本谷遺跡10区出土土器一覧表	15
3 堤六本谷遺跡10区出土溝跡一覧表	17
4 堤六本谷遺跡10区出土石器一覧表	20
5 堤三本柳遺跡2区出土土壤一覧表	29

報告書抄録

図版目次

巻頭図版

- PL. 1 堤六本谷遺跡 1 区 全景
- 2 堤三本松遺跡 1 区 全景
- 3 堤三本柳遺跡 2 区 全景
- 4 堤三本柳遺跡 2 区 ST-013全景

図版

- 5 堤六本谷遺跡10区 遺構(1)
- 6 堤六本谷遺跡10区 遺構(2)
- 7 堤六本谷遺跡10区 遺構(3)・遺物(1)
- 8 堤六本谷遺跡10区 遺物(2)
- 9 堤六本谷遺跡10区 遺物(3)
- 10 堤三本柳遺跡 2 区遺構(1)
- 11 堤三本柳遺跡 2 区遺構(2)
- 12 堤三本柳遺跡 2 区遺構(3)
- 13 堤三本柳遺跡 2 区遺構(4)
- 14 堤三本柳遺跡 2 区遺構(5)・遺物(1)
- 15 堤三本柳遺跡 2 区遺物(2)
- 16 堤三本柳遺跡 2 区遺物(3)

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (Fig. 1・2)

堤六本谷遺跡、堤三本松遺跡および堤三本柳遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のはば中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町と、南部は同郡三根町と、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。また、この神埼郡との境界は、旧来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のはば中央を東西に横断する国道34号線付近の三田川町と接する地区は郡境と呼称されている。

島栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部に背振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって浸食され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に洪積世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、中央部に発達する洪積世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回調査を行った堤六本谷遺跡、堤三本松遺跡および堤三本柳遺跡が所在する町北部の大字堤地区は、中央を北部の鎮西山山麓を源とする切通川本流が小さく蛇行しながら南流し、これに幾条かの小河川が流入し支流を形成している。これら切通川本支流の浸食作用によって形成された谷底平野を境界として、堤地区には、大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。

平成7年度に調査を実施した堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字六本谷、一本柳に所在し、切通側東岸の標高24m～40m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山山麓から南西へ派生する丘陵（以下、青柳丘陵と呼称する。）で、東方の八藤遺跡、新立古墳群が立地する八藤丘陵とは切通川支流の大島井川によって、西方の屋形原遺跡が立地する丘陵（以下、屋形原丘陵と呼称する。）とは切通川本流によってそれぞれ分かたれている。この丘陵高位段丘面には青柳古墳群が立地しており、丘陵周辺部の低位段丘面に遺跡は広がっている。

平成8年度に調査を実施した堤三本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本黒木に所在し、切通川西岸の標高36m～38m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脊振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する屋形原丘陵の東辺からさらに南へ舌状に派生する低位段丘で、東方の鎮西山の南麓から広がり、堤五本松遺跡、青柳古墳群などが立地する丘陵とは切通川本流によって、西方の屋形原丘陵本体とは小浸食谷よってそれぞれ分かたれている。

平成9年度に調査を実施した堤三本柳遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本柳に所在し、鎮西山南麓から南へ派生する青柳丘陵の基部標高50m付近から、さらに西に派生する標高30m～50mの洪積世丘陵上に遺跡は位置している。

2. 歴史的環境 (Fig. 2)

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から洪積世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部および各段丘上には、現在、遺跡の存在が知られ、県内においても

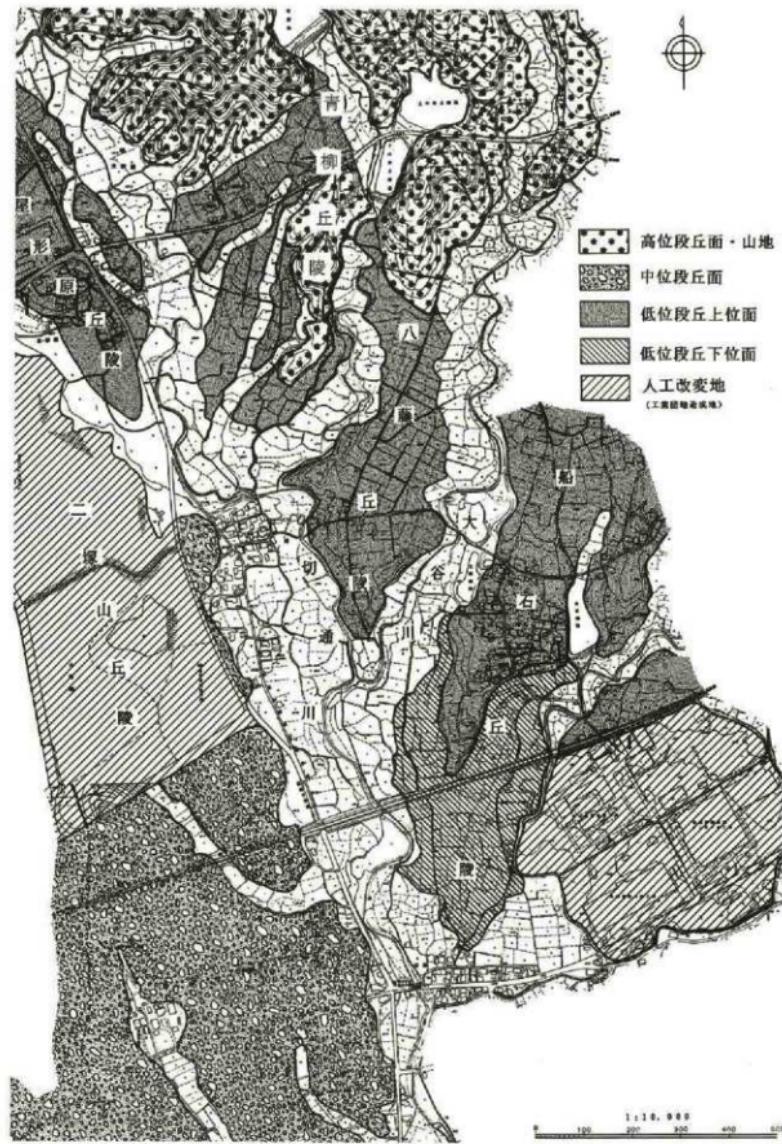


Fig. 1 上峰町北部地形概略図 (1/10,000)

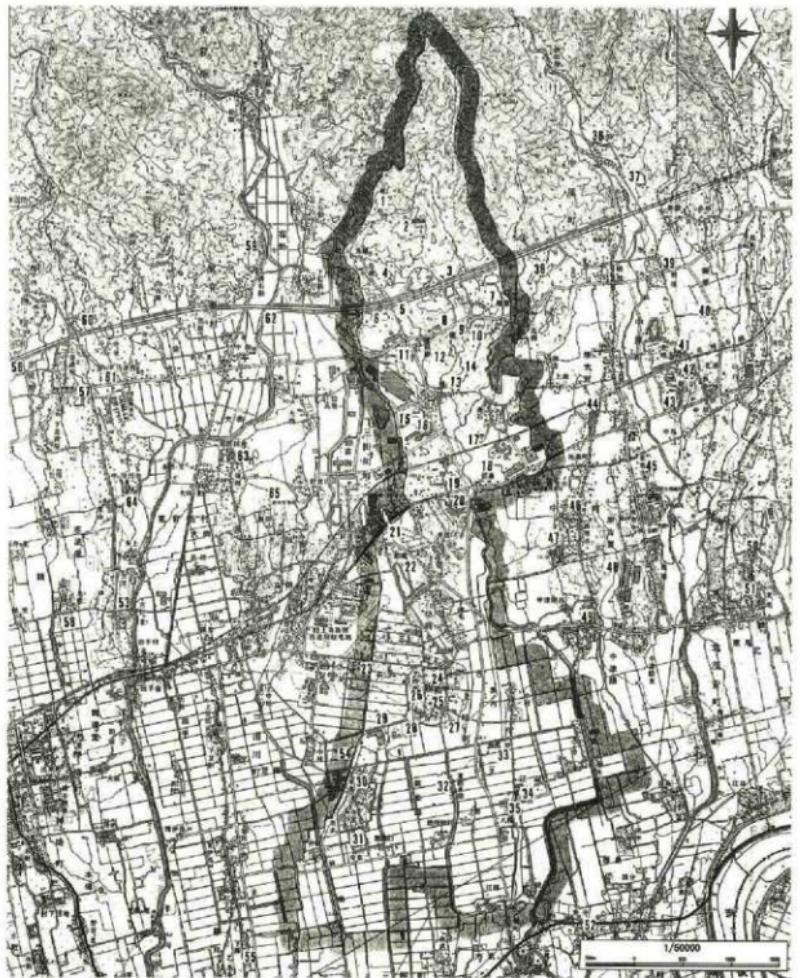
とくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ、弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した島根市安永田遺跡⁹、約400基の壺棺墓が検出された中原町姫方遺跡¹⁰、12本の銅矛を埋納した北茂安町枝見谷遺跡¹¹、壺棺墓から舶載鏡を出土した神崎郡東脇振村三津永田遺跡¹²、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神崎郡三田川町・神崎・東脇振の2町1村にまたがる吉野ヶ里遺跡¹³など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12km、東西約3kmと南北に細長い町域を持つ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡についてみると、各段丘の層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八幡遺跡の調査において細石刃1点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である¹⁴。周辺地域では、神崎郡三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取例が報告されている¹⁵。また、平成5年度の県営農業基盤整備事業に伴う八幡遺跡下層における阿蘇4火碎流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良-Tn火山灰(AT)の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風化土層の最上部付近でアカホヤと共に検出されている¹⁶。

縄文になると、中原町香田遺跡¹⁷や東脇振村戦場ヶ谷遺跡¹⁸などが出現する。町内においても、これまで町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されてきたが、この度の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡11区¹⁹、平成2年度から5年度にわたり実施した八幡丘陵の調査²⁰において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴國」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町の南部や中央部の米多地区、坊所地区的丘陵部は、中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の堤地区周辺では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては、壺棺墓から細形鋼劍や貝鏡を出土した切通遺跡²¹、神崎郡東脇振村、三田川町にまたがる、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い壺棺墓、土壙墓など約300基が調査され、舶載鏡、小型彷彿鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡²²、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡²³、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓をはじめ多数の壺棺墓が検出された船石遺跡²⁴などが知られている。また、この度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡²⁵、船石南遺跡²⁶、八幡遺跡²⁷から住居址や壺棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になるとこの地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡²⁸、上峰町一本谷遺跡²⁹などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から佐賀郡大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前



上野町	1 奥の院古墳群	12 横六本谷遺跡	24 坂所城跡	36 山田農耕器出土地	47 西寒木遺跡	56 志波屋六本松遺跡
2 須賀山古墳	13 星土墓群	25 桜寺遺跡	37 山田古墳群	48 全溝谷遺跡	57 伊勢坂廻方里円墳	
3 青柳古墳群	14 八幡山遺跡	26 今令遺跡	38 大和宮	49 大和宮前後円墳	58 馬鹿遺跡	
4 二本柳古墳群	15 三尾山遺跡	27 力石本松遺跡	39 井掛遺跡	50 大和古墳	東北遺跡	
5 須西山古墳群	16 五本谷遺跡	28 坂所三木松遺跡	40 斎宮遺跡	51 東尾頭前出土遺跡	59 西石動古墳群	
6 堀三木松遺跡	17 石石遺跡	29 塚の坂斯木路	41 段万原跡	52 三段町	60 戰場ヶ谷遺跡	
7 屋形星古墳群	18 鶴石南遺跡	30 上糸多貝塚	42 鶴方東方後円墳	53 木分貝塚	61 三津水田墓跡	
8 谷瀬古墳群	19 切通跡	31 糸多城跡	43 鶴方東方後圓墳	54 本分貝塚	62 西石動遺跡	
9 青柳古墳群	20 一本谷遺跡	32 前半田城跡	43 旗方反遺跡	55 三田川町	63 伝報遺跡	
10 新立古墳群	21 坂所一本谷遺跡	33 加茂蘿叢集落跡	44 ドンドン落遺跡	53 吉野ヶ里丘遺跡群	64 芋上廻寺跡	
11 屋形星遺跡	22 上のびゅう桜古墳	34 江越城跡	45 町市遺跡	54 下中枕遺跡	55 橫田遺跡	
	23 日達原古墳群	35 一ノ橋蘿叢集落跡	46 天神遺跡	55 下鹿貝塚		

Fig. 2 堤六本谷遺跡・堤三本柳遺跡・堤三本柳遺跡の位置及び周辺遺跡 (1/50,000)

方後円墳が出現する。鳥栖市劍塚古墳^④、中原町姫方古墳^⑤、上峰町西南部から神崎郡三田川町にまたがる目達原古墳群^⑥、神崎郡神崎町伊勢塚古墳^⑦、佐賀市銚子塚古墳^⑧、佐賀郡大和町船塚古墳^⑨など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期になると、現在長崎自動車道や県道佐賀川久保鳥栖線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡綾部・米多郷に属する当時の上峰町一帯は、「古事記」、「国造本紀」などの記事によれば応持天皇の曾孫にあたる「福紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から神崎郡三田川町東部の目達原一帯にあったと推定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、稻荷塚などの前方後円墳6基ほか古稻荷塚など円墳数基からなる目達原古墳群^⑩が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査後破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく5世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳^⑪が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷瀬、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は、神崎郡三田川町下中枝遺跡^⑫、同郡東脊振村下石動遺跡^⑬などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少なくいままで実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中枝遺跡、東脊振村辛上庵寺跡^⑭、靈仙寺跡^⑮などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土星跡^⑯や塔の坂庵寺跡^⑰などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土星跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年度からの土星の東方に接する八藤丘陵の調査において、土星東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され^⑱、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の坂庵寺跡は、百濟系单弁丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の都司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や町内の大规模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡^⑲の調査などまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた^⑳。しかし、昭和40年代

後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が埴物跡とともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している²⁰。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

註

- 1) 藤瀬横博・石橋新次 「抽比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書」 佐賀市文化財調査報告書第30集 佐賀市教育委員会 1980
- 2) 木下巧・天本洋一 「姫方遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
- 3) 七田忠昭 「見谷遺跡」 北茂安町文化財調査報告書第2集 北茂安町教育委員会 1986
- 4) 金闇丈夫・坪井清足・金闇忍 「佐賀県三津水田遺跡」「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961
- 5) 七田忠昭他 「吉野ヶ里」 佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992
- 6) 原田大介 「八藤遺跡Ⅲ」 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999
- 7) 七田忠志 「原始」「上峰村史」 上峰村 1979
- 8) 下山正一・西田民雄 「II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質」「佐賀平野の阿蘇4火碎流と埋没林」 上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
- 9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋 「香田遺跡」「香田遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐賀県文化財調査報告書第57号 佐賀県教育委員会 1981
- 10) 七田忠志 「佐賀県戦場ヶ谷遺跡」「史前文誌」 6-2・4 1984
- 11) 原田大介 「船石遺跡V」 上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
- 12) 原田大介 「八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ」 上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
前出(6)
- 13) 金闇丈夫・金闇忍・原口正三 「佐賀県切通遺跡」「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961
- 14) 高島忠平・七田忠昭他 「二塚山遺跡」「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 15) 七田忠昭 「一本谷遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 16) 七田忠昭 「船石遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 17) 鶴浩二・原田大介 「船石遺跡Ⅱ 図録編」 上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴浩二・原田大介 「船石遺跡Ⅱ 本文編」 上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 18) 昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
- 19) 原田大介 「八藤遺跡Ⅰ」 上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997
- 20) 木下巧他 「姫方原遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
- 21) 木下巧・七田忠昭 「五本谷遺跡」「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 22) 石橋新次 「剣塚前方後円墳」 佐賀市文化財調査報告書第22集 佐賀市教育委員会 1984
前出(2)
- 24) 松尾慎作 「目連原古墳群調査報告」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第9輯 佐賀県教育委員会 1950
- 25) 木下之治 「古代国家の形成」「佐賀県史」 佐賀県 1968
- 26) 木下之治編 「続子塚」 佐賀市教育委員会 1976
- 27) 松尾慎作 「佐賀県考古大観」 荷徳博物館 1959
前出24
- 29) 前出24
- 30) 七田忠昭・高山久美子・西田和己 「下中塙遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
- 31) 高瀬哲郎他 「下石動遺跡」「下石動遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 佐賀県文化財調査報告書第36集 佐賀県教育委員会 1987
- 32) 松尾慎作 「東脊振村辛上廐寺跡の調査」「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第5輯 佐賀県 1936
- 33) 田平慶栄他 「雲仙寺跡」 東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
- 34) 高島忠平・糸井一義 「堤土塁跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 35) 松尾慎作 「塔の塚廢址」 佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告 第7輯 佐賀県 1940
前出24
- 37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 38) 米倉二郎 「中世」「上峰村史」 上峰村 1979
- 39) 原田大介 「坊所城跡」 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II. 調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業經營が連續として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業經營による農家經濟を圧迫する事態となった。この農家經濟の行き詰まりを打開するためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業經營の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。

佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以降、町の中央部を東西に横断する国道34号線以南の沖積平野に広がる町南部の圃場を対象に昭和58年度まで事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の浸食谷底平野からなっており、地区的1戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があつてされていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を來していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた從来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な変更を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日の要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となつた。この課題の解決策として、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」(昭和53年4月締結、昭和59年4月一部改正。)という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者による協議が行われ、事業の実施面積の調整、工事の設計変更などによる埋蔵文化財発掘調査面積の縮小など、文化財の保護に関する調整が行われてきた。

この調整は、「農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」にて実施されており、具体的には、例年以下の手続きを踏んでいる。

(1) 「第1回協議会」(毎年10月中旬)

次年度の農業基盤整備事業実施計画が提示され、当該区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財確認調査の要不を確認する。

(2) 確認調査(10月中旬～12月上旬)

次年度の農業基盤整備事業実施計画地区内について遺構の有無・密度・内容、遺構面までの表度の深度等を把握する。

(3) 「第2回協議会」(毎年12月中旬)

確認調査の結果を基に、事業計画の設計変更など本調査面積の縮小につとめ、必要最小限の部分を次年度埋蔵文化財本調査区域とする。

上峰町における上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年9月に、県農業基盤整備事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、国道34号線以北、JR長崎本線以南の耕地について農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議をもったことに始まる。以後、毎年この協議を経て農業基盤整備事業と埋蔵文化財の保護との調整を行っている。

今回報告する堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡を含む地域についての埋蔵文化財の取り扱いについての協議、調整は以下のとおりであった。

平成3年10月17日、「平成4年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」(第1回)が開催された。協議の結果、平成4年度以降の農業基盤整備事業の対象地区のうち、確認調査が未実施の区域について、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、県道富士中原停車場線の東側で長崎自動車道と県道佐賀川久保鳥居線の間の耕地、さらに県道佐賀川久保鳥居線以南では冢原集落付近の谷水田部、八藤丘陵北部付近、青柳丘陵およびその周辺の田面、耕地約18.2haを対象に、稲刈り終了をまって実施した。調査は、2m×2mの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。その結果、青柳丘陵では、県道佐賀川久保鳥居線以北の区域で青柳古墳群および堤三本柳遺跡が立地する低位段丘面から遺構が検出され、同県道以南の区域では堤六本谷遺跡が立地する低位段丘面部分において遺構が検出された。また、長崎自動車道の南の区域では、屋形原丘陵の東辺から小半島状に派生する低位段丘面に位置する堤三本松遺跡で遺構が検出された。

このように今回報告する3遺跡についての確認調査は平成3年度に実施したが、平成4年度から6年度までは農業基盤整備事業が他の工区を対象に実施され、平成7年度になって県道佐賀川久保鳥居線以南の堤六本谷遺跡を含む区域が事業の対象となり、以後、平成8年度には堤三本松遺跡を含む区域、平成9年度には青柳古墳群および堤三本柳遺跡を含む区域を対象に事業が実施されることとなった。年度ごとに「農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」において遺跡の取り扱いについての協議を行い、最終的に、以下のとおり、事業予定期区内の遺跡について、事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

Tab. 1 農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査協議一覧（平成7年度～9年度）

年 度	「文化財の保護に関する協議会」		遺跡名	調査地区名	調査面積
	第1回	第2回			
平成7年度	平成6年10月11日	平成6年12月16日	堤六本谷遺跡	10区	3,250m ²
平成8年度	平成7年10月11日	平成7年12月15日	堤三本松遺跡	1区	625m ²
平成9年度	平成8年10月14日	平成8年12月18日	堤三本柳遺跡	2区	1,875m ²

III. 平成7年度堤六本谷遺跡10区の調査

1. 堤六本谷遺跡と調査区の概要 (Fig. 1, 3 · PL. 1)

堤六本谷遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本柳、六本谷の「青柳丘陵」と呼称する洪積世段丘の先端部（標高25m～35m付近）に位置している。青柳丘陵は、鎮西山南麓から派生し、長崎自動車道を横断し、さらに県道佐賀川久保鳥居線の南へと舌状に延びる丘陵となっており、東方の八藤丘陵、西方の屋形原丘陵とは、それぞれ、東は切通川支流の大島居川、西は切通川本流によって分たれている。

本丘陵上には、県道以南の高位段丘（標高30m～45m付近）上に小円墳が点在しており、青柳古墳群の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたものの、高位段丘面の周辺に広がる低位段丘上位面については、これまで埋蔵文化財の所在の有無について不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、平成元年度および平成3年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、この低位段丘部分において弥生時代、奈良時代、近世の遺構・遺物が検出され、全体で20,000m²ほどの集落遺跡が所在していることが判明し、堤六本谷遺跡の名称で新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。また同時に、本遺跡の南方約200m付近には、東の八藤丘陵と西の二塚山丘陵の間の谷部を東西に遮断する形で堤土壘跡が築かれており、遺跡がこの後背地にあたることから、堤土壘の築造目的解明につながるような遺構の存在も期待された。

遺跡が立地する大字堤字一本柳、六本谷地区の青柳丘陵先端部にあたる低位段丘上位面は、前述のように高位段丘面の周辺に発達しているが、小水路によって浸食された小谷によりいくつかの支丘に分かれヤツデの葉状を呈している。現在は、主に水田あるいは畑として利用されている。

堤六本谷遺跡のうち、平成7年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、大字堤字一本柳地区で、現屋形原集落東方の切通川東岸の標高30m～35m付近の低位段丘面に位置し、農業基盤整備事業の施工によって削平が予定されている部分3,250m²部分について、10区の調査区名で調査を実施した。

発掘調査は、調査対象区域全域にまたがる部分に座標北を基準とする10m×10mグリッドを東西列東からA～Iの9列、南北列北から1～5の5列を設定、これを基準に実施した。

調査区域は、堤六本谷遺跡の北辺にあたるものと考えられ、調査区域の東半部分では遺構の密度が極端に少なくなっている。また、調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

堤六本谷遺跡の今回の調査では、古墳時代の堅穴式住居址1軒、奈良時代の堅穴式住居址3軒、掘立柱建物址3棟、土壙17基、溝跡4条その他ピットなどが検出された。これらの遺構に伴い、土師器、須恵器を中心に若干の遺物が出土した。

2. 調査の経過

平成7年度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、圃場基盤造成工事により面上に削平が予定される部分3,250m²に便宜的に10区の調査区名を冠して実施した。現地での調査は、平成7年4月17日に着手し8月30日まで現場にて作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

4月17日、調査区の表土剥ぎに着手する一方で、作業員が集合し、現地にて簡単な発掘調査の安全祈願を行った後、発掘機材の搬入、休憩所に使用するテント設営などを行い、午後から作業員の人力による遺構検出作業を開始し

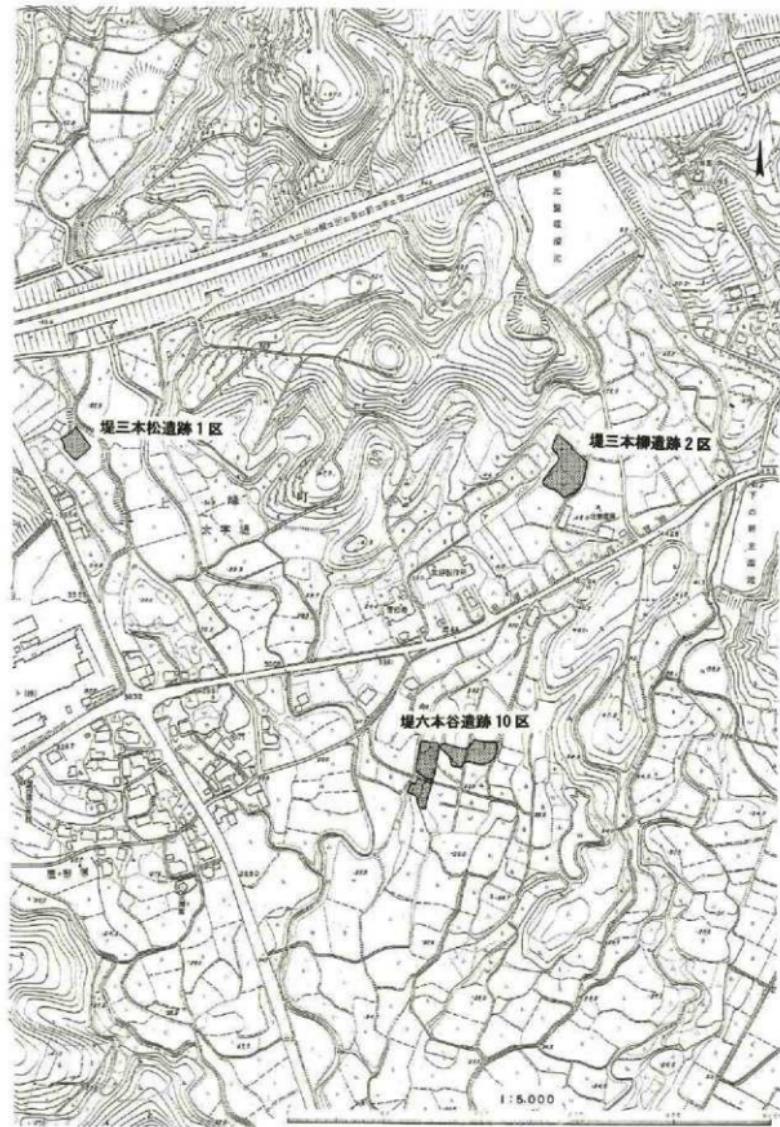


Fig. 3 堤六本谷遺跡・堤三本松遺跡・堤三本柳遺跡周辺地形図及び調査区位置図 (1/5,000)

た。以後、表土剥ぎが終了した部分について、逐次遺構検出作業を進めていった。表土剥ぎは6月2日に終了した。

4月24日、遺構の掘り下げ作業に着手。これまで検出した遺構について逐次掘下げを行い、必要に応じて遺構の写真撮影を行った。

4月28日から5月7日まで、ゴールデンウイークに伴い作業休止。

連休後も重機による表土剥ぎと作業員による遺構検出、掘り下げ作業を併行して続けたが、遺構の密度が少なく、遺構掘り下げ作業の進捗に表土剥ぎ作業が間に合わない状態となったため、5月13日から21日まで作業員による作業を休止し、表土剥ぎのみを行った。

5月22日から、作業員による遺構検出、掘り下げ作業を再開。

6月後半から7月下旬まで梅雨の時期で調査は進捗しなかった。7月10日、調査区全域の測量杭打ちを行った。7月27日より遺構の実測作業を開始。梅雨明けの7月後半からは天候にも恵まれ、調査の範囲を調査区南部へ8月4日、遺構の掘り下げ作業終了。その後、遺物の取り上げ作業、遺構の写真撮影などを行い、8月10日、調査区全体の気球写真撮影。

8月30日、遺構の実測作業が終了し、現場での作業を終了した。

その後、出土遺物、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末まで、遺物の水洗い、実測図、写真類の整理などを同事務所にて実施し、平成7年度の作業を終了した。

3. 遺構 (Fig. 4～8・PL. 1、5～7)

10区の調査で検出された遺構は、古墳時代の竪穴式住居址1軒、奈良時代の竪穴式住居址3軒、掘立柱建物址3棟、土壙17基、溝跡4条その他ピットなどであった。

(1) 竪穴式住居址 (Fig. 4、5・PL. 1、5、6)

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、SH-008、SH-009、SH-015、SH-026の4軒であった。各住居の年代は出土遺物などから、SH-009が古墳時代後期、他の3軒は奈良時代の所産になるものと考えられる。

SH-008 (Fig. 5・PL. 5)

SH-008は、H-2 Gr. で検出された方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約3.2m×短辺約2.9m、床面積8.0m²。主柱穴は不明。住居東壁の中央よりやや北に位置にカマドをもつ。カマド構築材と思われる山砂や焼土が約1mの範囲で壁際にうず高く堆積し潰れた状態で検出された。壁には、鍵道と考えられる20cm程の突出部が設けられている。床面までの掘り込みの深さは50cm程度。主軸は、N-88°-Eである。重複して検出されたSH-009を切っている。

SH-009 (Fig. 5・PL. 5)

SH-009は、H-2 Gr. でSH-008と重複して検出されたやや不整な方形の竪穴式住居址。規模は、長辺約5.6m×短辺約4.9m、床面積は推定で18.3m²。床面に柱穴状のピットは見られるものの、主柱穴は不明。住居の北東隅をSH-008によって切られているが、床面までの掘り込みの深さは20cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-89°-Eとほぼ東西方向である。

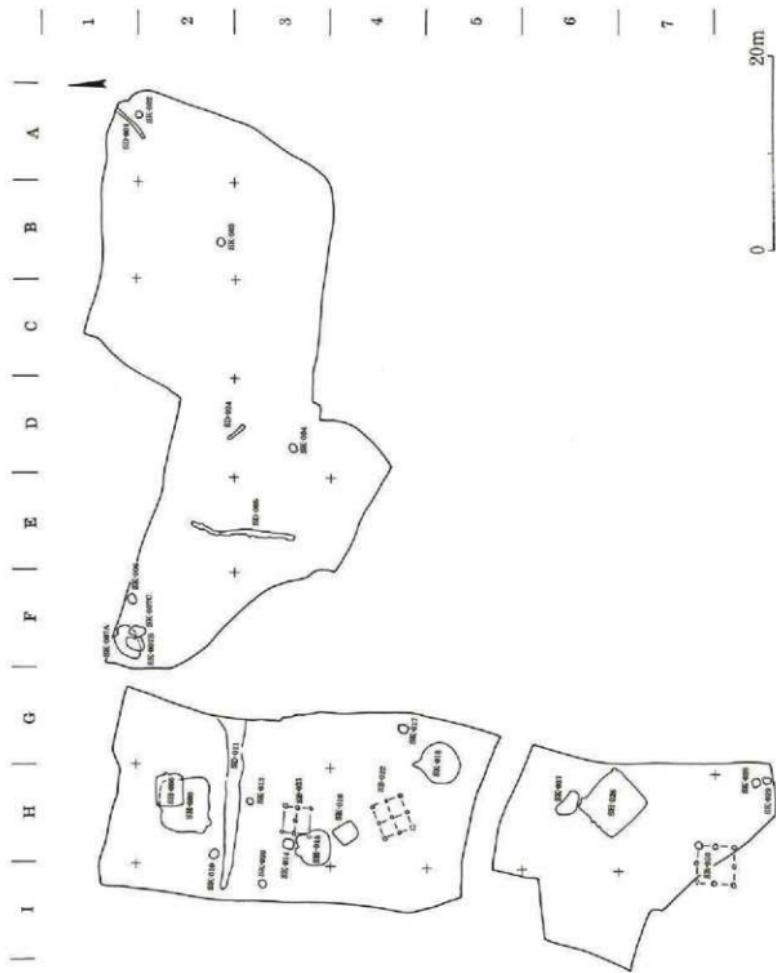


Fig. 4 堤六本谷遺跡10区遺構配置図 (1/500)

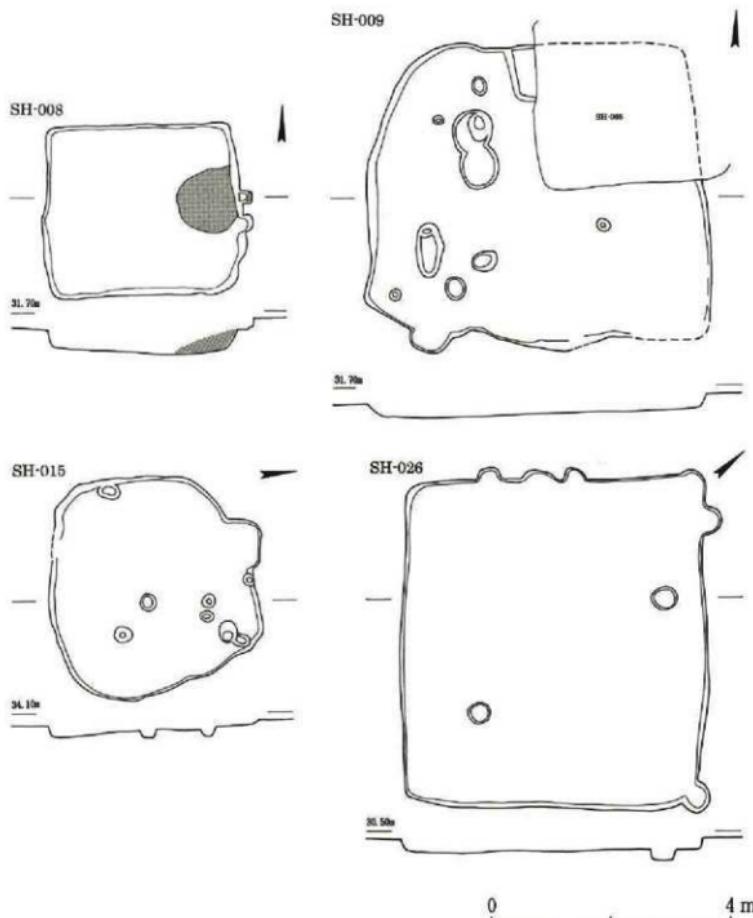


Fig. 5 提六本谷遺跡10区竪穴式住居址実測図 SH-008・SH-009・SH-015・SH-026 (1/80)

SH-015 (Fig. 5・PL. 5)

SH-015は、H-3 Gr. で検出されたやや不整な隅丸方形の竪穴式住居址。規模は、一辺約3.5m、床面積は9.8m²。床面に柱穴状のピットは見られるものの、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは10cm程度。主軸は、南北軸を基準にするとN-6°-Wである。

SH-026 (Fig. 5 · PL. 6)

SH-026は、H-6・7Gr.で検出された方形の堅穴式住居址。規模は、長辺約5.5m×短辺5.2m、床面積は25.8m²。床面に柱穴状のピットは見られるものの、主柱穴は不明。床面までの掘り込みの深さは25cm程度。主軸は、長辺を基準にするとN-46°-Wである。

(2) 挖立柱建物址 (Fig. 4、6 · PL. 1)

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、SB-021、SB-022、SB-030の3棟で、いずれも平

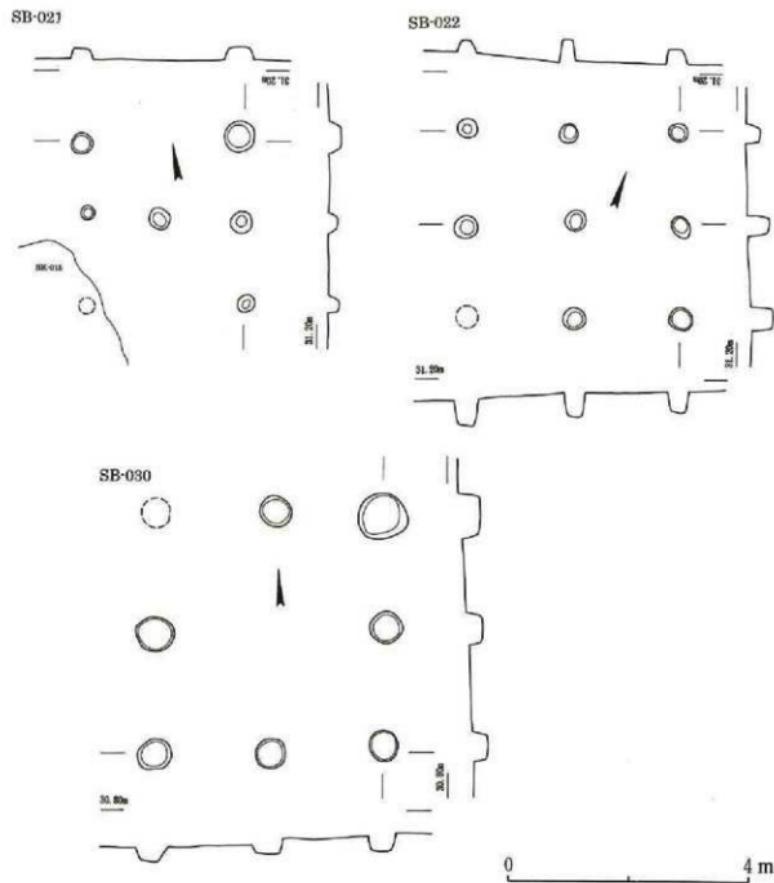


Fig. 6 堤六本谷遺跡10区掘立柱建物址実測図 SB-021・SB-022・SB-030 (1/80)

面形態2間×2間と考えられる建物である。各建物の年代は、柱穴から須恵器や土師器を出土したSB-030を除き、出土遺物がなく断定はできないが、その形態からいずれも奈良時代の所産になるものと考えられる。

SB-021 (Fig. 6)

SB-021は、H-3 Gr. で検出された2間×2間と推定される、平面形態がほぼ正方形を呈す掘立柱建物址。南北両辺のそれぞれ中央と南西隅の柱穴が失われている。規模は、桁行2.7m×梁行2.6m、桁行の柱間は、1.35m、梁行の柱間は1.3m、床面積7.0m²。主柱穴は直径25cm～50cm、深さ20cm程度の円形の掘り方。長軸を基準にすると、主軸はN-9°-Eである。

SB-022 (Fig. 6)

SB-022は、H-4 Gr. で検出された2間×2間の平面形態がほぼ正方形を呈す掘立柱建物址。南西隅の柱穴が失われている。規模は、桁行3.5m×梁行3.1m、桁行の柱間は、1.75m、梁行の柱間は1.55m、床面積10.9m²。主柱穴は直径30cm～50cm、深さ25cm～50cm程度の円形の掘り方。長軸を基準にすると、主軸はN-68°-Eである。

SB-030 (Fig. 6)

SB-030は、H-I-7・8 Gr. で検出された2間×2間の平面形態が正方形を呈す掘立柱建物址。建物中央および北西隅の柱穴が失われている。規模は、桁行4.0m×梁行4.0m、柱間は、2.0m、床面積16.0m²。主柱穴は直径50cm～80cm、深さ20cm～30cm程度の円形の掘り方。主軸はほぼ南北方向でN-2°-Eである。

(3) 土 壤 (Fig. 4, 7, 8・PL. 1, 7・Tab. 2)

今回の調査で土壤として取り扱った貯藏穴などの遺構は17基であった。これらの土壤のうち、出土遺物などから時期が特定できる土壤は、土師器の甕を出土したSK-002、中世土器を出土したSK-018の2基のみで、その他の土壤は、まとまった遺物をもつものもなく、時期を特定するまでには至らなかった。

Tab. 2 堤六本谷遺跡10区 出土土壤一覧表 (P. 17へ続く)

遺構番号	平面形態	規格(上段:上面・下段:底面、単位m・m ²)				柱穴状の ピットなど	出土 遺 物	備 考
		長さ	長径	幅・短径	深さ			
SK-002	円形	0.76 0.49	0.73 0.60		0.15	0.3		土師器甕
SK-003	不整円形	0.91 0.69	0.80 0.64		0.42	0.3		
SK-004	隅丸長方形	0.96 0.88	0.67 0.62		0.12	0.5		
SK-006	不整円形	1.20 1.00	1.06 0.86		0.15	0.7	壁際に 浅いピット	
SK-007A	楕円形	3.02 3.00	2.43 2.24		0.17	6.8		
SK-007B	不整方形	1.85 1.50	1.32 1.08		0.62	1.3		
SK-007C	不整形	1.72 1.42	1.05 0.62		0.43	0.9		
SK-010	隅丸長方形	1.02 0.91	0.82 0.68		0.12	0.6		
SK-013	円形	0.58 0.76	0.80 0.76		0.25	0.4		
SK-014	方形	1.03 0.94	0.96 0.86		0.24	0.7		
SK-016	不整方形	2.19 1.91	1.99 1.78		0.24	3.1		

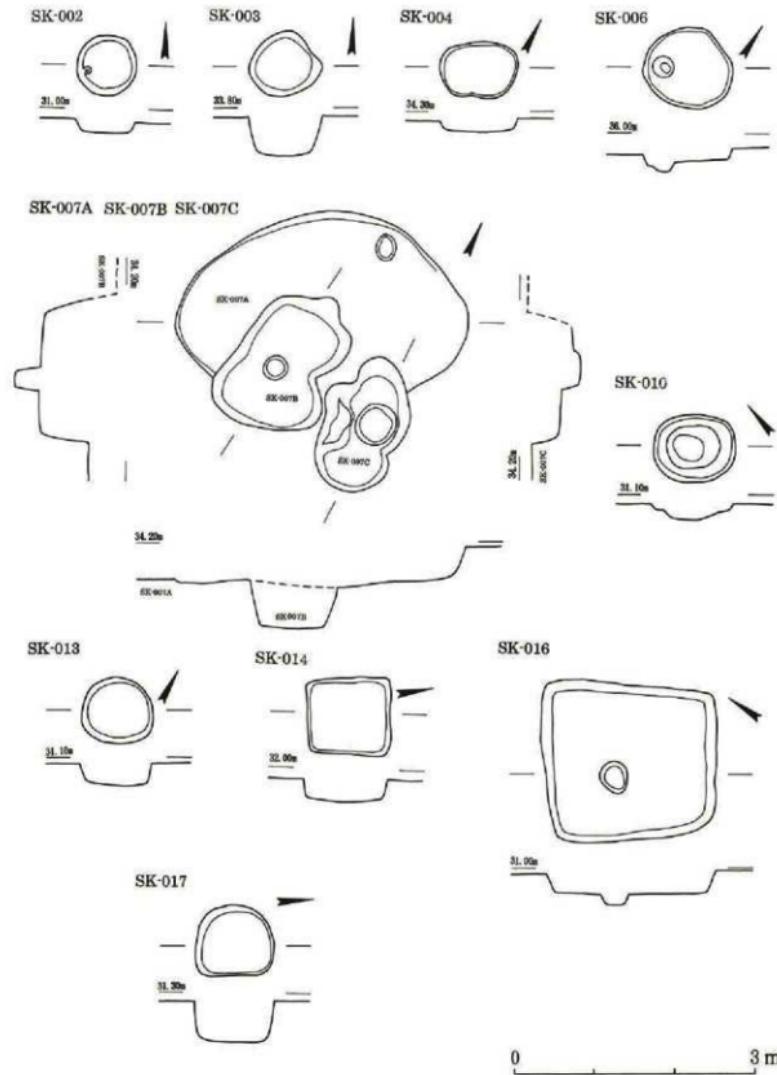


Fig. 7 堤六本谷遺跡10区土壤実測図(1)
SK-002～SK-004・SK-006・SK-007・SK-010・SK-013・SK-014・SK-016・SK-017 (1/60)

Tab. 2 堤六本谷遺跡10区 出土土壤一覧表 (P. 15から続く)

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m ²)				柱穴状の ピットなど	出土 遺物	備 考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-017	不整 隅丸方形	0.96 0.84	0.86 0.74	0.46	0.5			
SK-018	不整円形	4.41 4.35	3.84 3.25	0.17	13.2		中世土器	
SK-020	円形	0.80 0.70	0.78 0.66	0.27	0.3			
SK-027	不整形	1.84 1.76	1.02 0.87	0.30	0.5			
SK-028	不整 隅丸方形	0.97 0.77	0.86 0.71	0.36	0.4			
SK-029	不整形	0.96 0.82	(0.6) (0.5)	0.35	(0.3)			

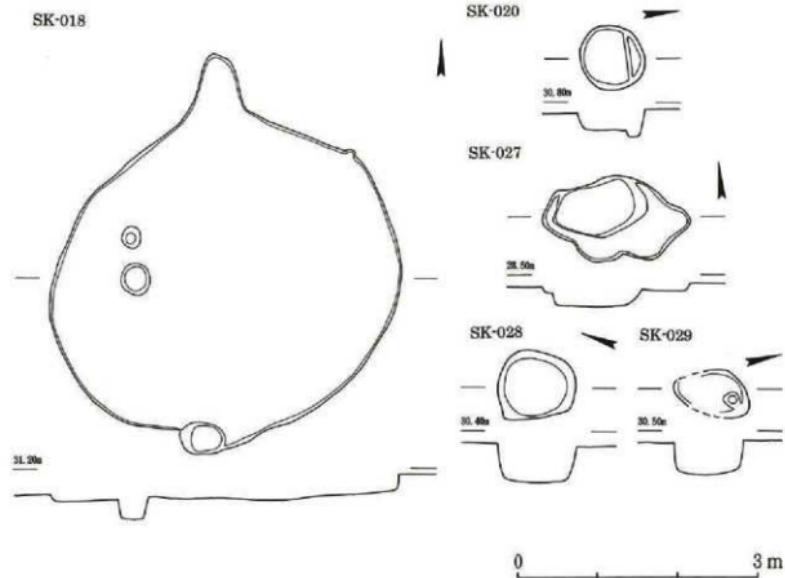


Fig. 8 堤六本谷遺跡10区土壤実測図(2) SK-018・SK-020・SK-027～SK-029 (1/60)

(4) 溝跡 (Fig. 4・PL. 1、6・Tab. 3)

今回の調査で検出された溝跡は、4条であった。いずれも素掘りの溝跡でこれらの溝跡のうち、時期を特定できるような遺物を出土した溝跡は、奈良時代の土器器の高壙を出土したSD-011の1条のみであった。

Tab. 3 堤六本谷遺跡10区 出土溝跡一覧表

遺構番号	検出場所	検出延長	断面形態	上面幅	底面幅	深さ	出土遺物	備 考
SD-001	A-1 Gr	4.3m	U字溝	0.35m	0.25m	0.20m		
SD-005	E-2・3 Gr	11.3m	U字溝	0.60m	0.50m	0.25m		
SD-011	G-I-2 Gr	17.8m	U字溝	1.30m	0.95m	0.30m	土器器高壙	
SD-024	D-2・3 Gr	2.2m	U字溝	0.25m	0.15m	0.10m		

4. 遺物 (Fig. 9、10・PL. 7～9)

今回の調査で前述した遺構から出土した遺物は、少量で、遺物が出土していてもそのほとんどが図示に耐えないような小片の場合も多かった。ここでは、図示できる遺物について遺構ごとに報告する。

SK-002出土土器 (Fig. 9・PL. 7)

1は、土師器甕。丸底で胴部中位に把手をもつ。胴部上位は内傾し、口縁は外傾し開く。内面ナデ、外面斜位のハケ目。

SH-008・009出土土器 (Fig. 9、10・PL. 7、8)

SH-008とSH-009は調査員のミスにより当初一つの遺構として発掘に着手、その後2軒の住居址が重複していたことが判明した。このため、本来SH-008の遺物と考えられる古墳時代の遺物とSH-009の遺物と考えられる奈良時代の遺物が混同している。遺物の型式から区分はできるがここでは一括して報告したい。

2～4は、須恵器坏。2、3は浅い体部で、蓋受けのかえりは外反しながら内傾する。4は高台坏、腰の張りが強く、体部はやや開きながら立ち上がる。底部外周よりやや内側にハの字形に開く高台がつく。5は須恵器甕の口縁。やや肥厚して立ち上がり、外反し大きく開く。6、7、15は、土師器の甕または瓶。6は口縁部がやや内湾し開く。内外面ともにナデ。7は胴部が直に口縁にいたる。内外面ともにナデ。15は砲弾型の胴部で、口縁が小さく開く。内面斜位のヘラケズリ、外面ナデ。8は土師器の甕。頸部がくびれ、口縁は外反しながら大きく開く。9は土師器の鉢。半球形の胴部に口縁は外反しながら開く。内面ナデ、外面横位のヘラケズリ。10は土師器甕の底部。11は、土師器の高坏の脚部。裾端部が小さくつまれ、下方に折り曲げられている。内外面ともにナデ。12は、須恵器の高坏。口縁と脚部を欠く。坏部には口縁と体部の境界に段がつき、脚部には縱長の細い四角形の透孔を3単位もつ。13は中世土器の小型の皿。底面には回転糸切り痕を残す。14は、用途不明の板状の土製品。厚さは1.0cm～1.4cm、上面観は本来隅丸の方形を呈すものと考えられ、断面はややアールをもつ。隅の部分が10cm×7cm程度遺存しており、角によった位置に径1cm強の孔が焼成前に穿孔されている。上面ハケ目、下面と側面はナデ。16は、弥生式土器の広口壺。やや上底気味の底部で胴部は扁平な玉ねぎ形を呈し、頸部は「く」の字形に強くくびれ短く外反する口縁が大きく開く。内外面ともにナデ。口縁上面から胴部下位にかけて赤色塗彩された痕跡が残る。

SD-011出土土器 (Fig. 10・PL. 9)

17は、土師器の高坏の脚部。裾部は外反し朝顔状に開く。外面にはロクロ目を明瞭に残す。

SH-015出土土器 (Fig. 10)

18は、土師器の甕または瓶。胴部上端がわずかに開き口縁となっている。内面縦位のヘラケズリ、外面粗いハケ目。19は、須恵器坏。体部は浅く、蓋受けのかえりは外反しながら内傾する。20は、須恵器。高坏の坏部と考えられる。体部は浅く盤状を呈し、口縁は斜め上方に短く屈曲する。

SH-026出土土器 (Fig. 10・PL. 9)

21、22は、土師器の甕または瓶。21は口縁が外反しながら開く。遺存部は内外面ともにナデ。22はやや小ぶり

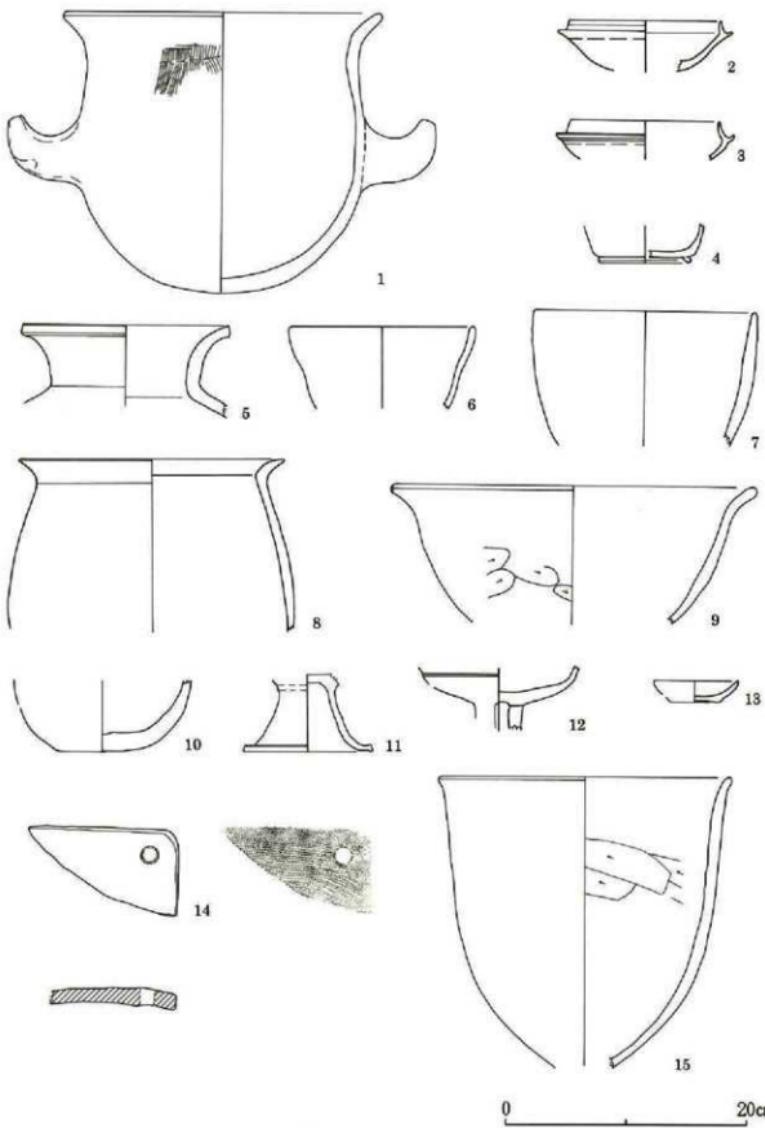


Fig. 9 堤六本谷遺跡10区出土遺物実測図(1) (1 / 4)

の胴部が外傾しながら口縁に至る。内面ヘラケズリ、外面粗いハケ目。23、31は、須恵器の甕。23は外反し開く口縁の外面に御描きの波状文をもつ。31は球形の胴部に口縁が外反しながら立ち上がる。外面に平行線状の叩き目を残す。24は、土師器の小形丸底壺。体部はやや広めで、口縁部が「く」の字形に屈曲し直線的に開く。内外面ともにナデ。25は、須恵器の広口壺。胴部は上位で内湾し口縁が上方に小さくつまれ立ち上がっている。26は、土師器の碗。底部はやや丸底で腰の張りが強く体はやや開きながら短く直立する口縁に至る。内外面ともにナデ。27、28は、須恵器の蓋。27は坏蓋。身受けはなく、体部は深く口縁部との境界に稜をもち、口縁がやや広がる。天井部外面カキ目。28はつまみと身受けのかえりをもつ蓋で、つまみは天井部から剥離し失われているが明瞭に痕跡を残している。口辺部は丸みを帯び、身受けの帰りは短く内傾する。29は須恵器の皿。全体的に分厚い作りで、底部は歪みが激しく、体部は短く外傾しながら開き口縁に至る。30は、土師器の高杯。坏部は浅い体部と口縁の境界に稜をもち、口縁はやや外反しながら開く。大きく開く脚部は中位でさらに関く。口縁端部と握端部をともに欠く。外面ともにナデ。

SB-030出土土器 (Fig. 10 · PL. 9)

32は須恵器の平瓶。上面が平坦な胴部は直径 9 cm 程度の円形の粘土盤で開口部が一度閉塞された後、改めて中心より 3 cm 程外に位置に徑 5 cm 程の穴が穿孔され、そこに内湾しながら開く口縁部が取り付けられている。33は、土師器の甕。胴部上端が内傾しながらびれ口縁部はほぼ水平に外へ開く。内面継ぎのヘラケズリ、外面粗いナデ。

SH-008・009出土石器 (PL. 9 · Tab. 4)

今回の調査において出土した石器は、SH-008・009から出土した石鎚 3 点のみであった。いずれも凹基式の石鎚で法量・材質は以下のとおりである。

Tab. 4 堤六本谷遺跡10区 出土石器一覧表

遺物 番号	種類	出土遺構	法量 (cm · g)				材質	備考
			長さ	幅	厚さ	重量		
34	石鎚	SH-008・009	2.9	1.8	0.4	1.6	黒曜石	
35	石鎚	SH-008・009	2.7	2.2	0.3	1.3	サスカイト	
36	石鎚	SH-008・009	2.4	1.8	0.3	1.1	サスカイト	

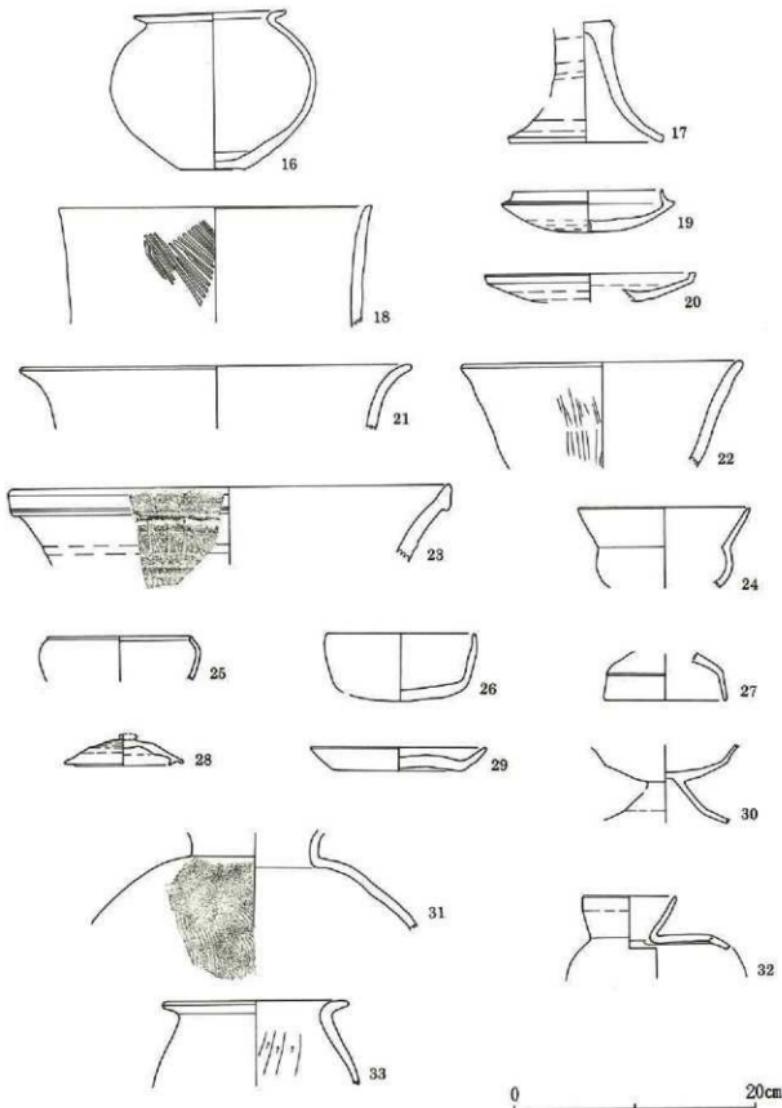


Fig. 10 提六本谷遺跡10区出土遺物実測図(2) (1/4)

IV. 平成8年度堤三本松遺跡1区の調査

1. 堤三本松遺跡と調査区の概要 (Fig. 1, 3, 11・PL. 2)

堤三本松遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字一本黒木に所在し、切通川西岸の標高36m～38m付近の洪積世丘陵上に位置している。遺跡が立地する丘陵は、鎮西山西方の神埼郡東脊振村との境界付近に位置する標高約70mの独立小丘から南東へ派生する屋形原丘陵の東辺からさらに南へ舌状に派生する低位段丘で、東方の鎮西山の南麓から広がり、堤五本松遺跡、青柳古墳群などが立地する丘陵とは切通川本流によって、西方の屋形原丘陵本体とは小浸食谷よってそれぞれ分かたれている。

本丘陵の本体である屋形原丘陵上には、蜜柑畑として開拓されるまでは小円墳が点在していたこと、現在のフランスベッド株式会社佐賀工場用地造成の際に多数の遺構や遺物が出土したことなどが知られていたが、今回の調査対象となった屋形原丘陵東辺の低位段丘面については、これまで埋蔵文化財の所在の有無については不明であった。

しかし、農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし、平成3年度に実施した埋蔵文化財確認調査によって、この低位段丘の先端部分において奈良時代から中世の遺構・遺物が検出され、この支丘上に2,500m²ほどの遺跡が所在していることが予想されるに至った。

堤三本松遺跡のうち、平成8年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、県道富士中原停車場線東側の区域の切通川東岸の標高36m～38m付近の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予定されている部分2,500m²のうち、この支丘の基部にあたる一画625m²を1区の調査区名で調査を実施した。

発掘調査は、調査対象区域全域にまたがる部分に座標北を基準とする10m×10mグリッドを東西列東からE～Iの5列、南北列北から2～5の4列を設定、これを基準に実施した。

調査区域は、現在、主に水田として利用されており、調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

堤三本松遺跡の今回の調査の結果、重機による表土剥ぎ作業の際、耕作土など表土中から土師器、須恵器片が散見されたものの調査区域内では明確な遺構は検出されなかった。このようなことから今回の調査区は遺跡の縁辺にあたるものと考えられるに至った。

2. 調査の経過

平成8年度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、圃場基盤造成工事により面上に削平が予定される部分625m²に便宜的に1区の調査区名を冠して実施した。現地での調査は、平成8年7月31日に着手し、12月3日まで作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

7月31日、梅雨明けを待って、調査区の表土剥ぎに着手した。

8月中は別事業の発掘調査実施のため作業休止。

9月17日午後より、作業員を招集し、発掘機材の搬入・休憩所に使用するテント設営など実施した。18日より遺構検出作業に着手、24日まで実施したが、調査区域内では、遺構は検出されなかった。

これを受けて、9月25日より調査区内にトレッチ及びグリッドを設定し、縄文時代以前の遺構、遺物の有無について確認作業を開始した。この作業を断続的に10月末まで続けたが新たに遺構、遺物は検出されなかった。

10月30日、トレント、グリッドの掘り下げ調査を終了、調査区全体の写真撮影を行った。以後、12月3日まで断続的に調査区の測量作業を行い、現地での作業を終了した。

その後、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末まで、実測図、写真類の整理などを同事務所にて実施し、平成8年度の作業を終了した。

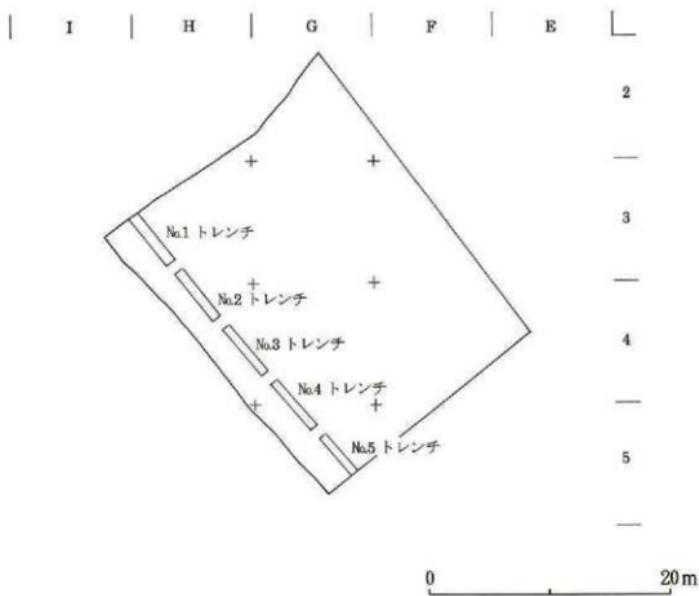


Fig. 11 堤三本松遺跡1区調査区全体図 (1/400)

V. 平成9年度堤三本柳遺跡2区の調査

1. 堤三本柳遺跡と調査区の概要 (Fig. 1、3・PL. 3)

堤三本柳遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本柳に所在し、鍋西山南麓から派生する洪積世丘陵、青柳丘陵の基部標高50m付近から県道佐賀川久保鳥柄線の北に沿って西に派生する標高30m～50mの洪積世低位段丘上に位置している。

平成3年度に実施した農業基盤整備事業施工予定地区を対象とし埋蔵文化財確認調査によって、この低位段丘の部分においても、土師器や須恵器を伴う土壌などが検出され、遺跡の広がりが確認された。

堤三本柳遺跡のうち、平成9年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった区域は、県道佐賀川久保鳥柄線北側の区域の標高46m～48m付近の低位段丘面で、農業基盤整備事業の施工によって削平が予定されている部分2,500m²のうち、1,875m²を2区の調査区名で調査を実施した。

発掘調査は、調査対象区域全域にまたがる部分に座標北を基準とする10m×10mグリッドを東西列東からA～Fの6列、南北列北から4～10の7列を設定、これを基準に実施した。

調査区域は、現在、主に水田として利用されており、調査区域の土層は、後世の耕作などによって各時代の遺物包含層は失われ、耕作土の直下が洪積世丘陵を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構露出となっている。

堤三本柳遺跡の今回の調査の結果、古墳時代後期の円墳1基、掘立柱建物址1棟、土塙22基その他ピットなどが検出された。これらの遺構に伴い、土師器、須恵器を中心とした遺物が出土した。

2. 調査の経過

平成9年度の農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、圃場基盤造成工事により面上に削平が予定される部分1,875m²に便宜的に2区の調査区名を冠して実施した。現地での調査は、平成9年10月21日に着手し、平成10年2月5日まで現場にて作業を行った。以下簡略に調査経過を記す。

10月21日、重機による調査区の表土剥ぎに着手した。

11月1日より、作業員を招集し、発掘機材の搬入・休憩所に使用するテント設営などを行った後、表土剥ぎが終了した部分から遺構検出作業に着手、検出した遺構については、ピット、土塙などの小遺構から逐次掘下げを行い、必要に応じて遺構の写真撮影を行うという手順で作業を進めていった。この間年末までに古墳1基をはじめ掘立柱建物址、土塙などが検出された。

12月25日、年内作業を終了。1月4日まで年末年始のため休業。年明け後も遺構の掘り下げ作業を進め、1月末までにほとんどの遺構の検出、掘り下げ作業を終了した。

1月26日、委託による遺構の詳細実測作業開始。これと平行して出土遺物の取り上げ作業などの作業を進めた。

2月3日、出土遺物、記録類、発掘機材類の撤収を行い、2月5日、調査区全体や個別の遺構の気球による空中写真撮影を行い現地での作業を終了した。

その後、記録類を文化財整理事務所へ移し、年度末まで、出土遺物の水洗い、実測図、写真などの記録類の整理作業を同事務所にて実施し、平成9年度の作業を終了した。

3. 遺構 (Fig. 12～18・PL. 4、10～14)

2区の調査で検出された遺構は、古墳時代後期の円墳1基、時期不明の掘立柱建物址1棟、土塙22基その他ピッ

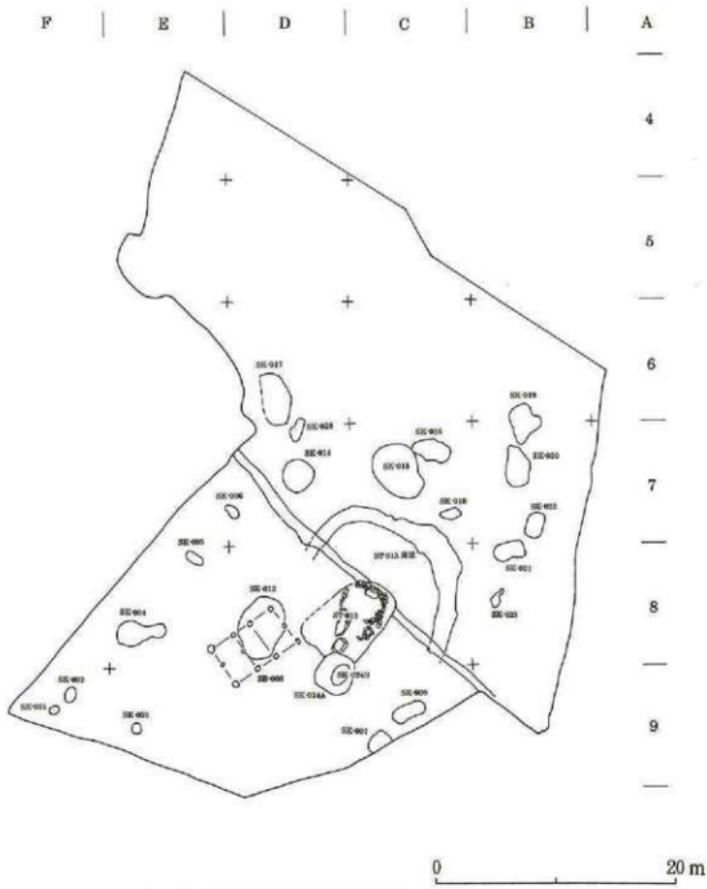


Fig. 12 墓三本柳遺跡 2 区遺構配置図 (1/400)

トなどであった。

(1) 古 墳 (Fig. 12~14・PL. 4、10)

ST-013は、今回の調査で唯一検出された円墳で、C・D-7~9 Gr. で検出された。青柳丘陵から西に派生する丘陵の尾根上標高46m付近に位置している。付近一帯が耕地として開かれたときに破壊されたものと考えられ、墳丘はまったく失われ、石室の掘り方の底部と石室の石材の一部及び墳丘北東側の周溝が全周の1/2弱遺存するのみであった。

古墳の形態や規模は、遺存している石室と周溝の位置からすると、墳形は正円ではなく、石室の主軸方向に長い

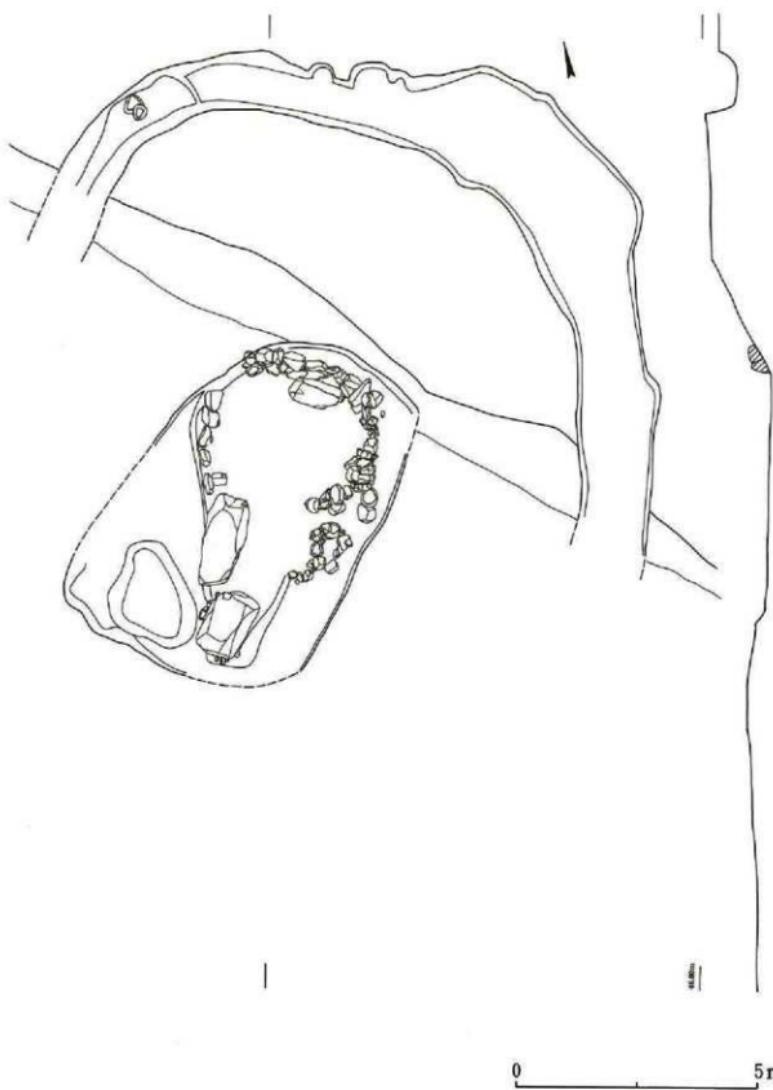


Fig. 13 堤三本桜遺跡 2 区古墳実測図 ST-013 (1 /100)

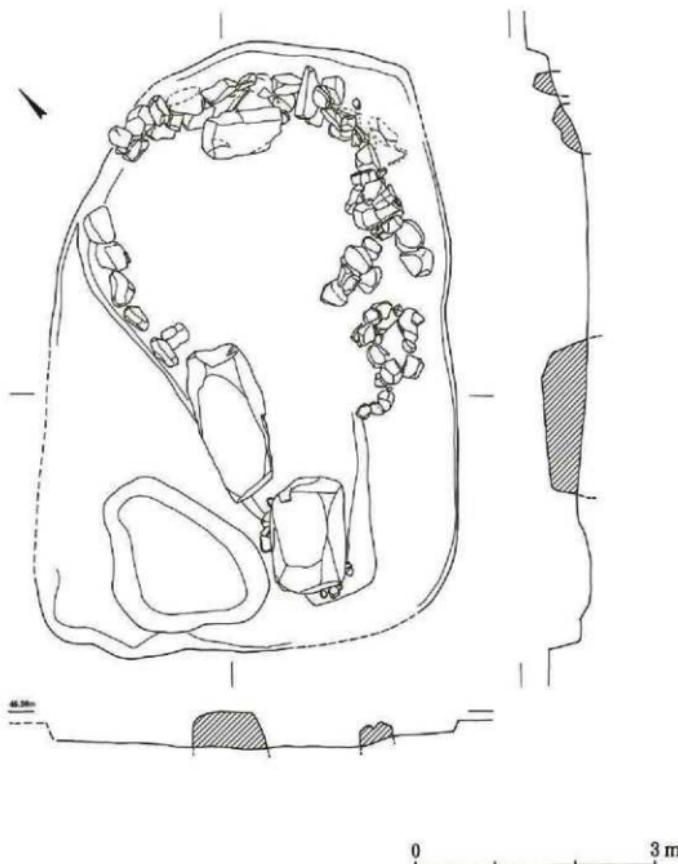


Fig. 14 堤三本柳遺跡 2 区古墳石室実測図 ST-013 (1 / 60)

小判形に近い椭円形で、推定長径17m、同短径12m程度の南南西に開口した横穴式石室を主体部とする円墳であったことが推定される。周溝は、耕地の段によって南西部の約1／2強が失われているが、幅は検出面で1m～2.5m、底面で0.7m～2.1m、深さ0.2m～0.4m、断面は、底面が広い「U」字形を呈す。

石室の掘り方は、長軸がN-45°-Eをとる長辺7.5m、短辺5.2mのやや不整な隅丸長方形を呈す（掘り方の深さは石材を除去し完壊する余裕がなかったため不明）。石材の出土状況から、石室は、この掘り方に約20°ほど西に偏った方向に築かれていると推定される。

石室も破壊がひどく、耕作の支障となるためか、本来石室を構成していたと考えられる腰石から上位の石材は天井石までの主要な石材がほとんど失われており、唯一主要な石材では、羨門の左側壁と考えられる石材だけが

原位置を保っているものと推定される。また、玄室にあたる部分には、挙大から3、40cm程度の裏込め石の一部と思われる石材が、本来側壁や奥壁の腰石があったと考えられる位置に散在した形で残っている。石室のプランは、玄室が約3m四方の方形でこれに幅1m、長さ3.5m程の横道がつくものと推定される。玄室の床面は、敷石などの施設ではなく、遺構検出面からの深さは約0.6m。石室の主軸は、横門の左側壁と考えられる石材を基準にするとN-27°-Eである。

遺物は、横道部およびその周辺から須恵器の壺、壺蓋、壺、横瓶?などが出土している。また、周溝内からは、直接古墳と関連すると考えられる土師器、須恵器など出土しなかったが、中世土器の土鍋などが出土しており、この時期に周溝が埋没したものと推定される。

(2) 捩立柱建物址 (Fig. 12, 15 · PL. 11)

SB-008は、今回の調査で唯一擗立柱建物址と考えられる遺構で、D-E-8·9 Gr. で検出された。平面形態は、3間×2間の長方形を呈す。総柱の建物かとも思われるが中央の桁の東から2本目の柱穴が見えない。規模は、桁行6.8m×梁行3.6m、桁行の柱間は、2.3m、梁行の柱間は1.8m、床面積24.5m²。柱穴は直径30cm~50cm、深さ40cm~60cm程度の円形の掘り方で、四隅の柱穴はいずれも二段掘りで、中央の桁の柱穴がやや細い。主軸はN-53°-Eである。柱穴出土の遺物はなく、時期は特定し得ない。

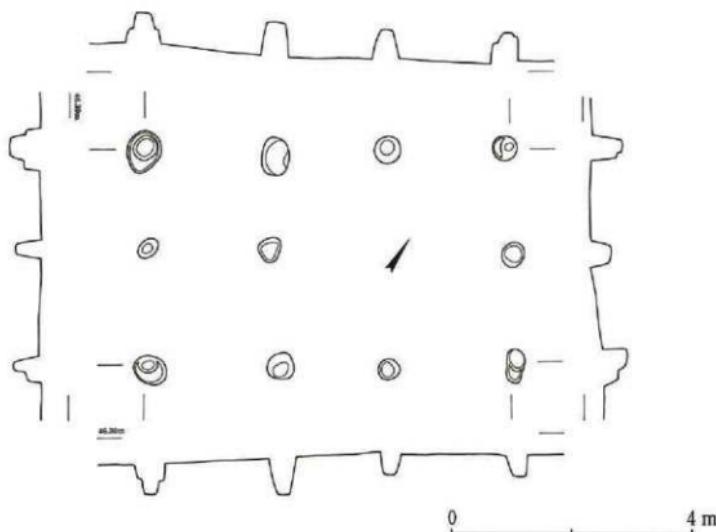


Fig. 15 堤三本柳遺跡 2 区擗立柱建物址実測図 SB-008 (1/80)

(3) 土 壤 (Fig. 12, 16~18 · PL. 11~14 · Tab. 5)

今回の調査で土壤として取り扱った貯蔵穴などの遺構は22基であった。これらの土壤のうち、出土遺物などから時期が特定できる土壤は、縄文式土器を出土したSK-024B、古墳時代の須恵器の壺などを出土したSK-023、

奈良時代の須恵器の壺などを出土したSK-012、土鍋など中世土器を出土したSK-002、SK-014、SK-017、SK-019、SK-020、SK-022、SK-024Aなどで、その他の土壙は、まとまった遺物がなく、時期を特定するまでには至らなかった。

Tab. 5 堤三本柳遺跡 2 区 出土土壤一覧表

遺構番号	平面形態	規模(上段:上面、下段:底面、単位m・m ²)				柱穴状の ピットなど	出土 遺物	備 考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-001	楕円形	0.90 0.56	0.67 0.42	0.83	0.2			
SK-002	楕円形	1.45 1.24	0.93 0.64	0.27	0.6		須恵器坏蓋	
SK-003	円形	0.85 0.62	0.76 0.59	0.69	0.3			
SK-004	不整形	3.96 3.64	2.10 1.67	0.87	3.8			
SK-005	隅丸長方形	1.64 1.38	0.67 0.46	0.42	0.6			
SK-006	不整形	1.40 1.27	0.78 0.66	0.47	0.6			
SK-007	隅丸方形	1.99 1.68	※1.5 ※1.4	0.38	※2.3			
SK-009	不整形	2.90 2.48	1.27 1.02	0.44	2.0			
SK-012	不整形	(5.2) 4.07	3.78 2.95	0.24	9.9	中央に ピット1本	須恵器壺	
SK-014	不整円形	2.70 1.72	2.67 1.36	0.27	1.8		中世土器土鍋、 縄文式土器深鉢	
SK-015	不整形	(4.8) (4.6)	3.70 3.48	0.17	※12.0	ピット 10本		
SK-016	不整形	(3.1) 2.60	1.96 1.82	0.32	3.3			
SK-017	不整形	7.37 7.01	※3.8 ※3.0	1.43	※21.0			
SK-018	不整形	※1.8 ※1.6	0.90 0.62	0.38	※0.8			
SK-019	不整形	2.54 2.40	2.00 1.80	0.13	4.0		中世土器土鍋、皿	
SK-020	不整形	3.42 3.12	1.88 1.40	0.33	3.4	壁際に ピット1本	中世土器土鍋、 擂鉢、皿	
SK-021	不整形	※2.4 ※2.1	1.52 1.26	0.12	※2.3			
SK-022	不整形	2.00 1.60	1.42 1.04	0.18	1.5		中世土器土鍋、皿、 須恵器坏	
SK-023	不整形	1.50 1.32	0.85 0.66	0.38	0.4		須恵器坏、坏蓋	
SK-024A	不整形	※3.5 ※3.3	3.08 2.82	0.21	※10.9	壁際に ピット1本	中世土器擂鉢、 須恵器坏	
SK-024B	不整円形	2.14 1.86	1.22 1.05	0.25	2.6		縄文式土器浅鉢	
SK-028	隅丸長方形	1.86 1.47	1.02 0.80	0.68	1.0			

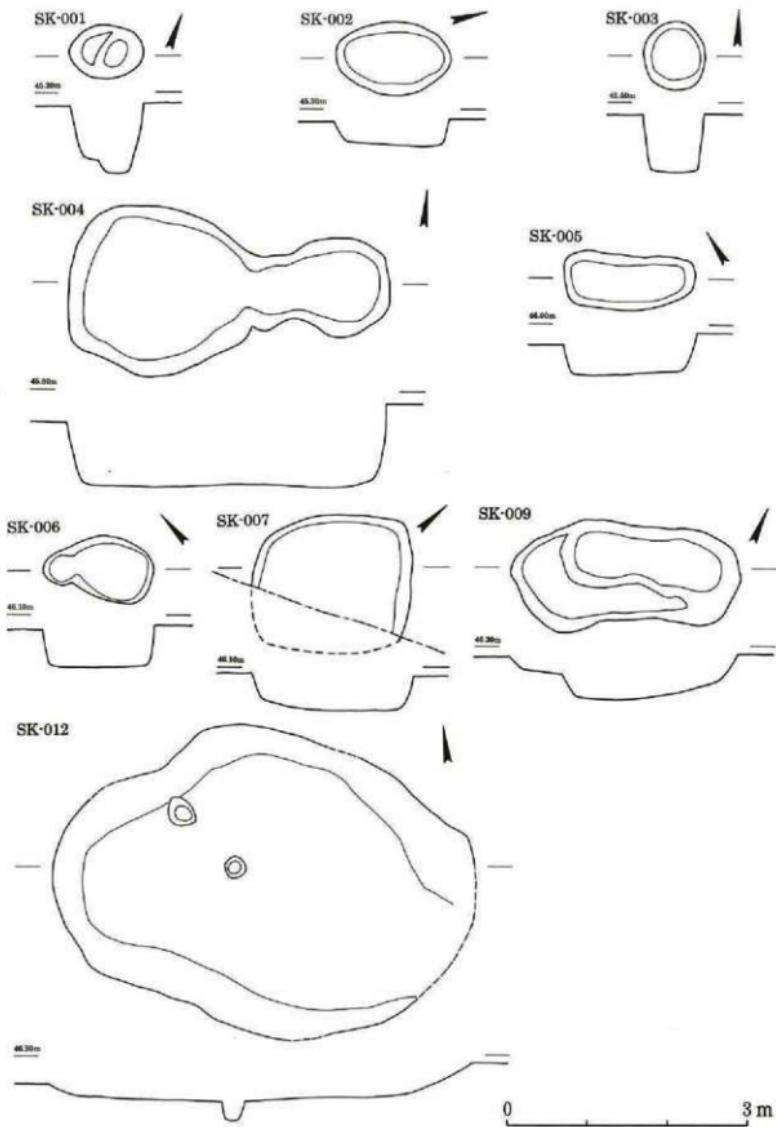


Fig. 16 提三本柳遺跡 2 区土壤実測図(1)SK-001～SK-007・SK-009・SK-012 (1 / 60)

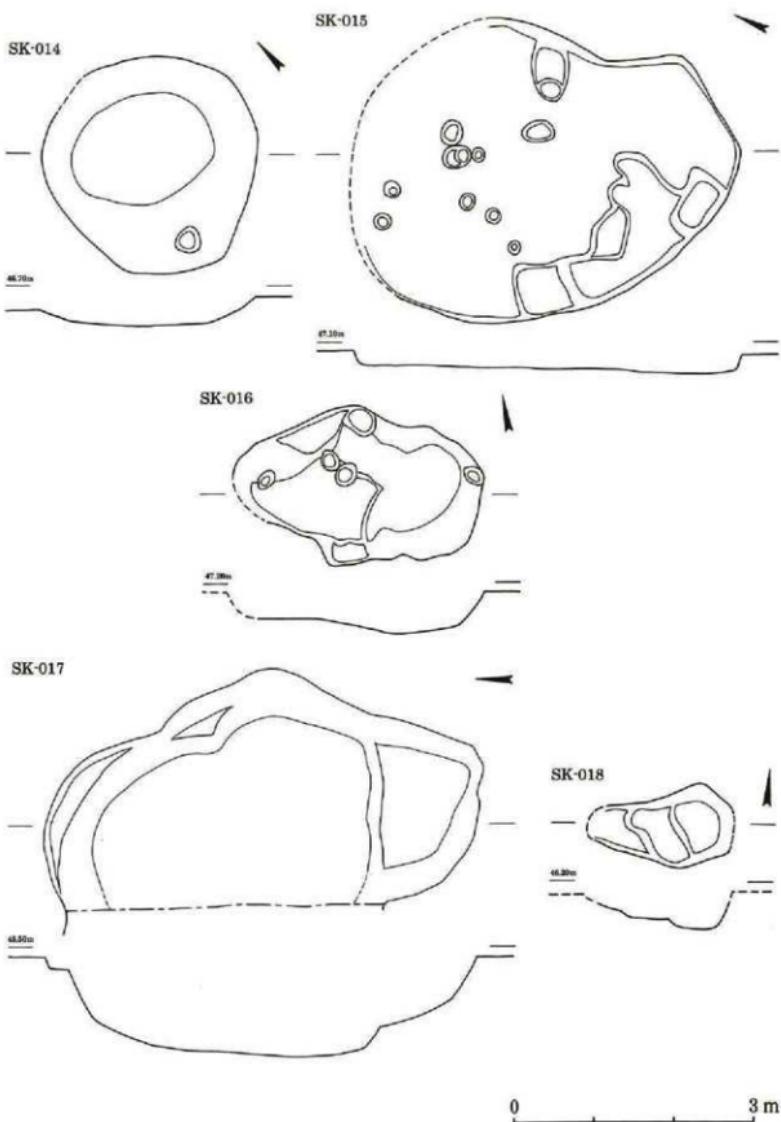


Fig. 17 提三本柳遺跡 2 区土壤実測図(2)SK-014～SK-018 (1 / 60)

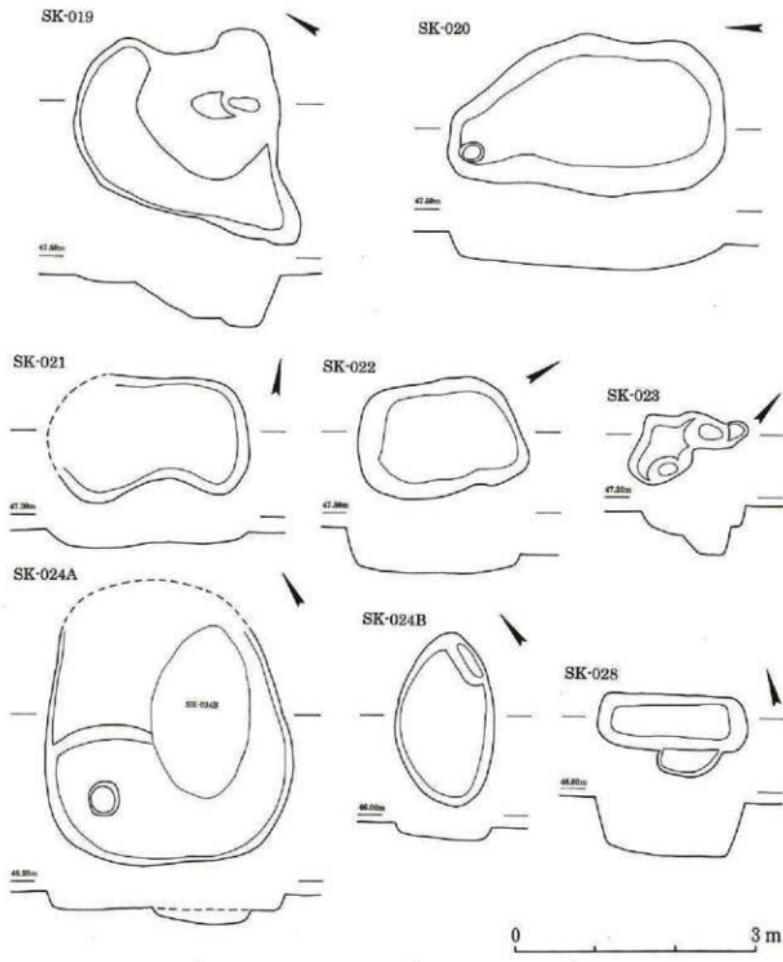


Fig. 18 堤三本柳遺跡 2 区土壤実測図(3)SK-019～SK-024A・SK-024B・SK-028 (1 / 60)

4. 遺物

(2) 遺物 (Fig. 19~21・PL. 14~16)

今回の調査で前述した遺構から出土した遺物は、少量で、図示に耐えないような小片も多かった。ここでは、図示できる遺物について出土した遺構ごとに報告する。

SK-002出土土器 (Fig. 19・PL. 14)

1は、須恵器坏蓋。天井部上面はほぼ平坦でつまみはなく、口縁は短く、やや内湾し受けのかえりはない。天井部外面へラケズリで、ヘラ描きの符号？をもつ。

SK-012出土土器 (Fig. 19・PL. 14)

2、3は、須恵器壺。2は口縁がやや外反しながら開き、口縁端部は上方に鋭くつままれている。3は、張りがない肩部に丸底で胴部中位に把手をもつ。口縁部はほぼ直立し大きく外反し外へ開く。胴部内面ナデ、外面カキ目。

ST-013出土土器 (Fig. 19・PL. 14, 15)

ST-013の遺物は、ほとんどが狭道付近から出土している。やや時期が下る遺物も混入しており、その時期に最初の破壊を受けたものと推測される。4、5は、須恵器壺身、いずれも底部丸底で蓋受けのかえりをもつ。4は口辺の張り出しが強く、蓋受けのかえりは内傾し、先端が鋭く尖る。底面は回転ヘラケズリ。5は口辺の張り出しが弱く、蓋受けのかえりは内傾する。6~13は須恵器の蓋類。6~9は坏蓋。6~8は天井部が丸味を帯び、体部と口縁部の境界に稜ではなく、受けのかえり、つまみはない。6は体部にやや張りをもち、口縁は短く内湾する。天井部上面へラケズリで、ヘラ描きの符号をもつ。7、8は体部の張りがなく、短い口縁がつく。9は天井部が水平で体部の張りが強く内湾しながら口縁に至る。10~13は、つまみや受けのかえりをもつ蓋。10~12は坏蓋。10は平坦な天井部に扁平な擬宝珠状のつまみをもち、口縁は丸味を帯び、受けは短く鈍い。天井上面はヘラケズリ。11は体部が浅く、平坦な天井部にボタン状の扁平なつまみをもつ。体部は肥厚し、口辺は外へ広がり、短く小さな受けがつく。天井上面はヘラケズリ。12は平坦な天井部でつまみはなく、天井部と体部の境界に稜をもち、口辺は大きく張り出し、短く小さな受けがつく。天井上面はヘラ切り後ナデ、ヘラ描きの符号をもつ。13は蓋などの蓋。体部はほぼ円盤状を呈し、口辺は鋭く尖る。受けは外反しながら内傾する。つまみを失っている。14は須恵器の横瓶？口縁から肩部にかけての一部が遺存している。胴部は樽形を呈し、正面觀は円形または縱方向にやや長い樽円形を側面間はやや張りのある方形を呈すものと推定され、この樽状の胴部の軸に対して垂直方向に口縁がつく。口縁は外反しながら朝顔状に開き、口唇端部が小さく上方につままれている。口縁外面、胴部側面外周はカキ目、胴部前面、内面はナデ。15は須恵器壺。やや外反しながら開く口縁で、口唇部は下方に折り曲げられ肥厚する。16は須恵器高台杯。腰が張った体部で、口縁はやや開きながら立ち上がり、さらに口唇端部が小さく外反する。底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く高台がつく。

SK-014出土土器 (Fig. 19・PL. 15)

17は、中世土器の土鍋口縁。内面ナデ、外面縦位のハケ目。18は、縄文式土器の深鉢？やや内傾する口縁で、口縁端よりやや下がった位置に刻み目凸帶が1条めぐる。

SK-019出土土器 (Fig. 19 · PL. 15)

19~21は、中世土器。19は素焼きのいわゆる「土器」。平底で口縁は直線的に広がる。底面に回転糸切痕を残す。20は鉢、口縁部が外傾し肥厚する。口縁上面は平坦でハケ目を残す。内面横位のハケ目。外面粗いナデ。21は土鍋、口縁部が外傾し肥厚する。内面横位のハケ目。外面粗いナデ。

SK-020出土土器 (Fig. 20 · PL. 15, 16)

22~27は、いずれも中世土器。22は素焼きの「土器」。平底で口縁は直線的に広がる。底面は糸切り後ナデ。23~25は擂鉢、23は胴部が直線的に開き口縁部がやや肥厚する。口縁上面は平坦でハケ目を残す。擂り目は3条1単位。内面斜位のハケ目。外面はハケ目の後ナデ。24は胴部がやや内済しながら立ち上がり口縁はやや肥厚する。擂り目は3条1単位。内面ナデ。外面はハケ目の後ナデ。25は胴部がやや内済しながら立ち上がり口縁が肥厚する。口縁端部は平坦でハケ目を残す。擂り目は4条1単位。内面斜位のハケ目。外面ナデ。26、27は土鍋。26は瓦質で、口縁が内済する。内面横位の、外面斜位のハケ目。27は口縁がやや外反し開く。内外ともに横位のハケ目。

SK-022出土土器 (Fig. 20, 21 · PL. 16)

28は、須恵器坏身。全体的に分厚い作りで、体部は浅めで口辺が外に張り出し、蓋受けのかえりは鈍く短く立ち上がる。29~31は、中世土器。29は「土器」、平底で口縁は直線的に広がる。底面に回転糸切痕を残す。30は擂鉢。胴部がやや内済しながら立ち上がり口縁が肥厚する。擂り目は4条1単位。内面横位のハケ目。外面ナデ。31は土鍋。口縁が下方に折り曲げられ肥厚する。内面横位のハケ目。外面ナデ。

SK-023出土土器 (Fig. 21)

32は、須恵器坏身。口辺は内済しながら外に張り出し、蓋受けのかえりは小さく短く立ち上がる。28~30は、中世土器。33、34は須恵器坏蓋。33は天井部が平坦で体部が内済しながら口縁に至る。天井部外面ヘラ切りの後ナデ。34は体部と口縁の境界に弱い稜をもつ。

SK-024A 出土土器 (Fig. 19 · PL. 16)

35は、須恵器坏身。丸底で体部は浅く、口辺は小さいが鈍く外に張り出し、蓋受けのかえりは外反し内傾する。底面に回転ヘラ切り痕を残す。底面に一文字状のヘラ焼きの符号をもつ。36は、中世土器の擂鉢。胴部はやや内済しながら立ち上がり口縁に至る。口縁の一部を幅6cm程度外に広げることにより、注ぎ口を作り出している。擂り目は4条1単位。内面斜位のハケ目。外面上部はナデ、下部はハケ目。

SK-024B 出土土器 (Fig. 21 · PL. 16)

37、38は繩文式土器。37は精製浅鉢の肩部破片。内外面ともにナデ。38は粗製深鉢胴部上位の破片、内面ナデ、外面条痕文。

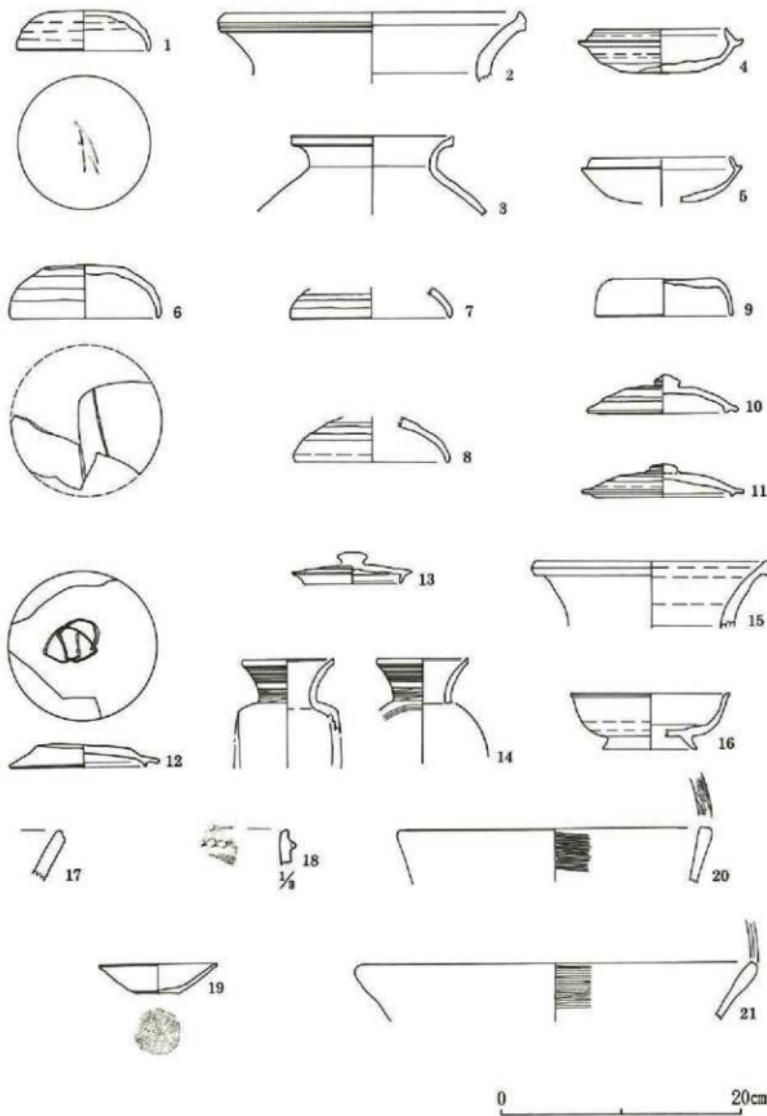


Fig. 19 堤三本柳遺跡 2 区出土遺物実測図(1) (1 / 4)

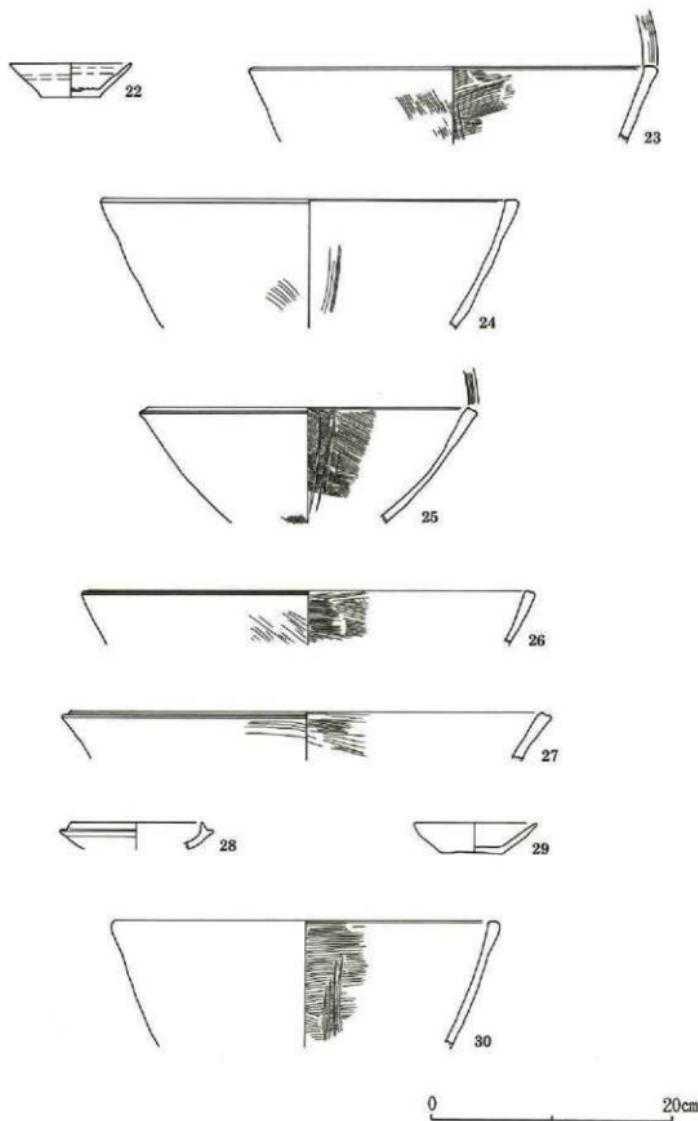


Fig. 20 堤三本拂遺跡2区出土遺物実測図(2) (1/4)

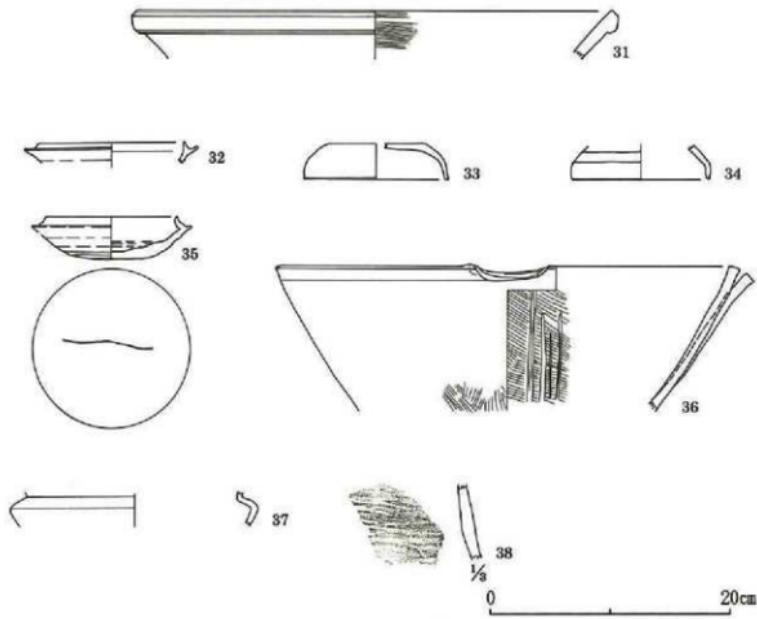


Fig. 21 堤三本柳遺跡 2 区出土遺物実測図(3) (1 / 4)

V. まとめ

今回の報告した3遺跡の調査では、量的には決して多いとはいえないが、縄文時代から中世に及ぶ遺構や遺物が検出された。以下、調査区ごとに調査の所見を列記し、まとめとしたい。

平成7年度堤六本谷遺跡10区の調査

堤六本谷遺跡10区は、同遺跡の中でも最北部にあたっている。ここから北東に続く高位段丘上には古墳時代後期の青柳古墳群が立地しているが、今回の調査区の遺構検出状況をみると、調査区の東部は遺構の密度が希薄で、今回報告した遺構のうちほとんどが調査区の西半部分で検出されている。このようなことから、今回の10区の調査区は遺跡の縁辺部にあたるものと考えられ、北東に隣接する青柳古墳群との間に中世墳まではある程度のスペースが保たれていたものと考えられる。

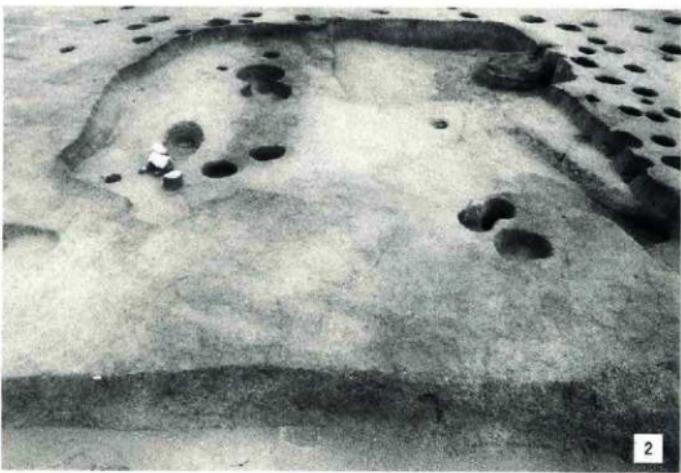
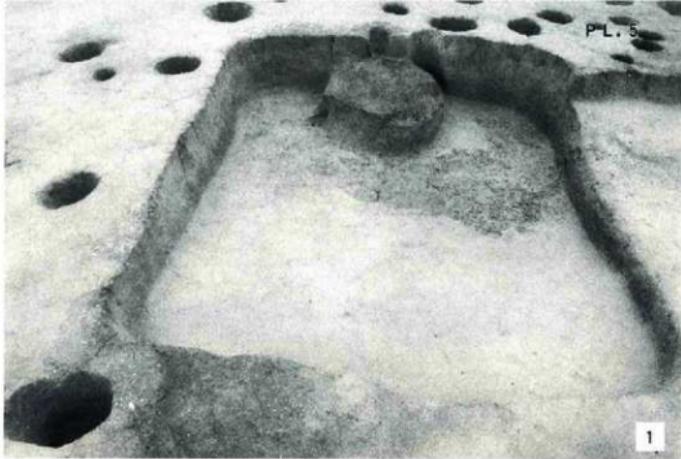
平成8年度堤三本松遺跡1区の調査

今回の堤三本松遺跡1区の調査では、断片的に土器器片、中世土器片なども出土したもの、残念ながら明確な遺構は検出されなかった。このようなことから、本調査区は遺跡の縁辺にあたり、本遺跡における遺構の広がりは、ここから北西部の県道富士中原停車場線付近が主体であろうことが推測される。

平成9年度堤三本柳遺跡2区の調査

今回の堤三本柳遺跡2区の調査で唯一検出された古墳ST-013は、推定長径17m、同短径12m程度の南南西に開口した横穴式石室を主体部とする円墳で、墳丘はまったく失われ、石室の掘り方の底部と石室の石材の一部及び墳丘北東側の周溝が全周の1／2弱遺存するのみであった。古墳の年代は、漢道付近から出土した須恵器の坏矢蓋を指標とすると、七世紀前半までは墳墓として機能していたものと考えられ、その後、中世の土塙SK-024Aが営まれる頃までにはすでに墳丘が破壊され、周溝が完全に埋没してしまったものと推定される。

図 版



堤六本谷遺跡10区

1. SH-008 (西より)
2. SH-009 (南より)
3. SH-015 (南西より)



堤六本谷遺跡10区
1. SH-026 (南東より)
2. SD-001 (南より)
3. SD-005 (北より)



1



5



2



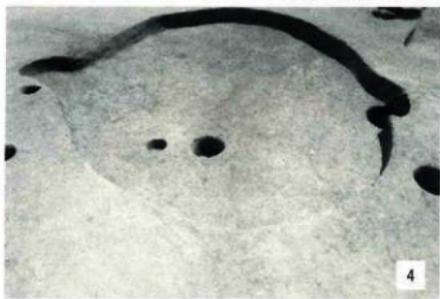
6



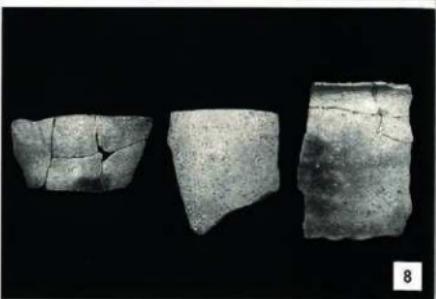
3



7



4



8

堤六本谷遺跡10区

1. SK-003 (北東より)
2. SK-006 (東より)
3. SK-016 (南東より)
4. SK-018 (西より)

5. SK-028 (東より)
6. SK-029 (北東より)
7. 1 SK-002出土
8. 6~8 SH-008・009出土



1



5



2



6



3



7



4



8

堤六本谷遺跡10区

1. 9 SH-008・009出土
2. 10 SH-008・009出土
3. 11 SH-008・009出土
4. 13 SH-008・009出土

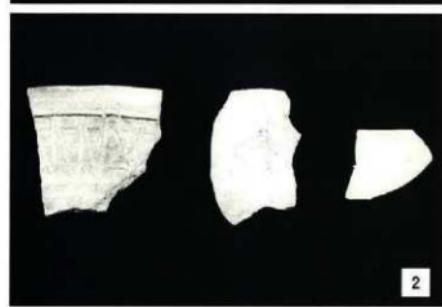
5. 14 SH-008・009出土
6. 14 SH-008・009出土
7. 15 SH-008・009出土
8. 16 SH-008・009出土



1



4



2



5



3



6



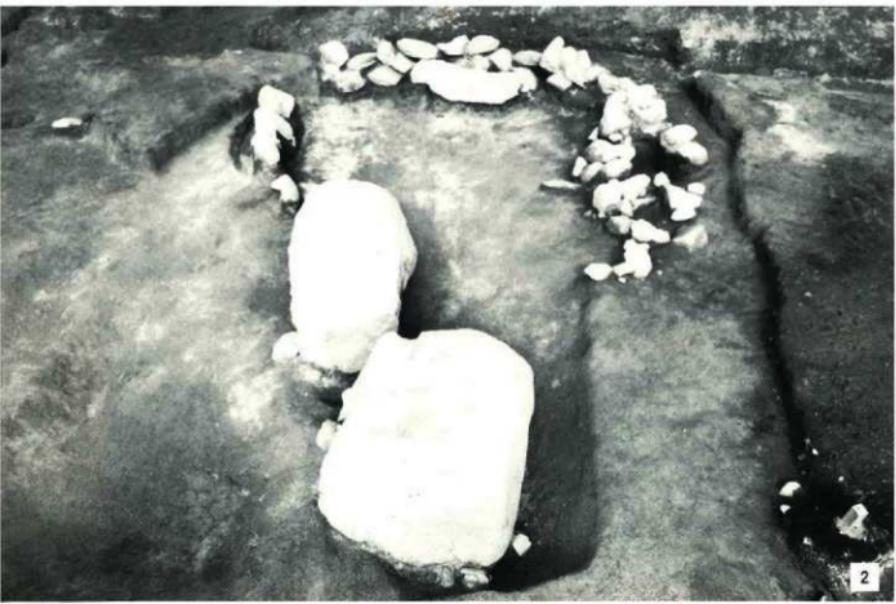
7

堤六本谷遺跡10区

1. 17 SD-011出土
2. 23~25 SH-026出土
3. 26 SH-026出土

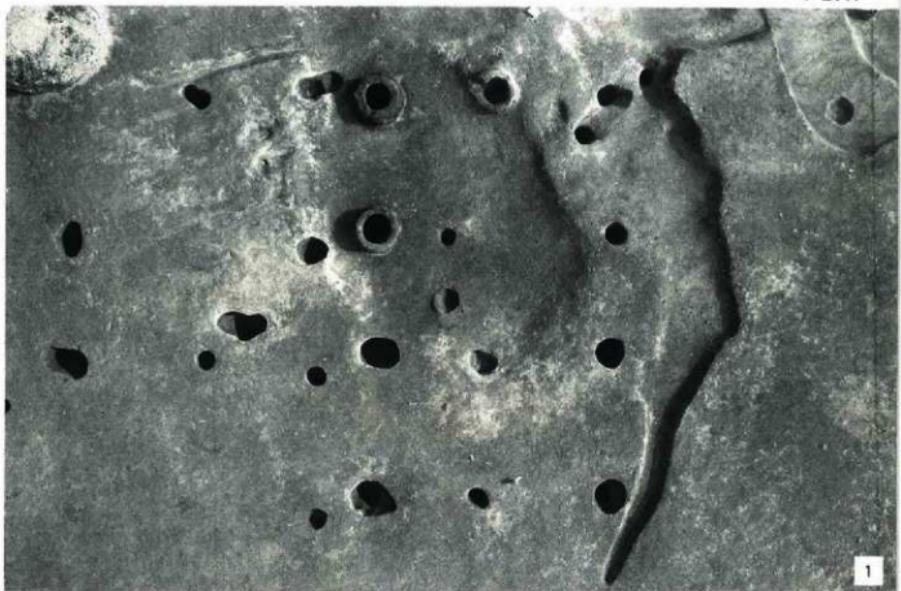
4. 28 SH-026出土
5. 30 SH-026出土
6. 32 SB-030出土

7. 33·34·35 SH-008·009出土



堤三本柳遺跡 2 区

1. ST-013石室（写真上方が北東）
2. ST-013石室（南西から）



1

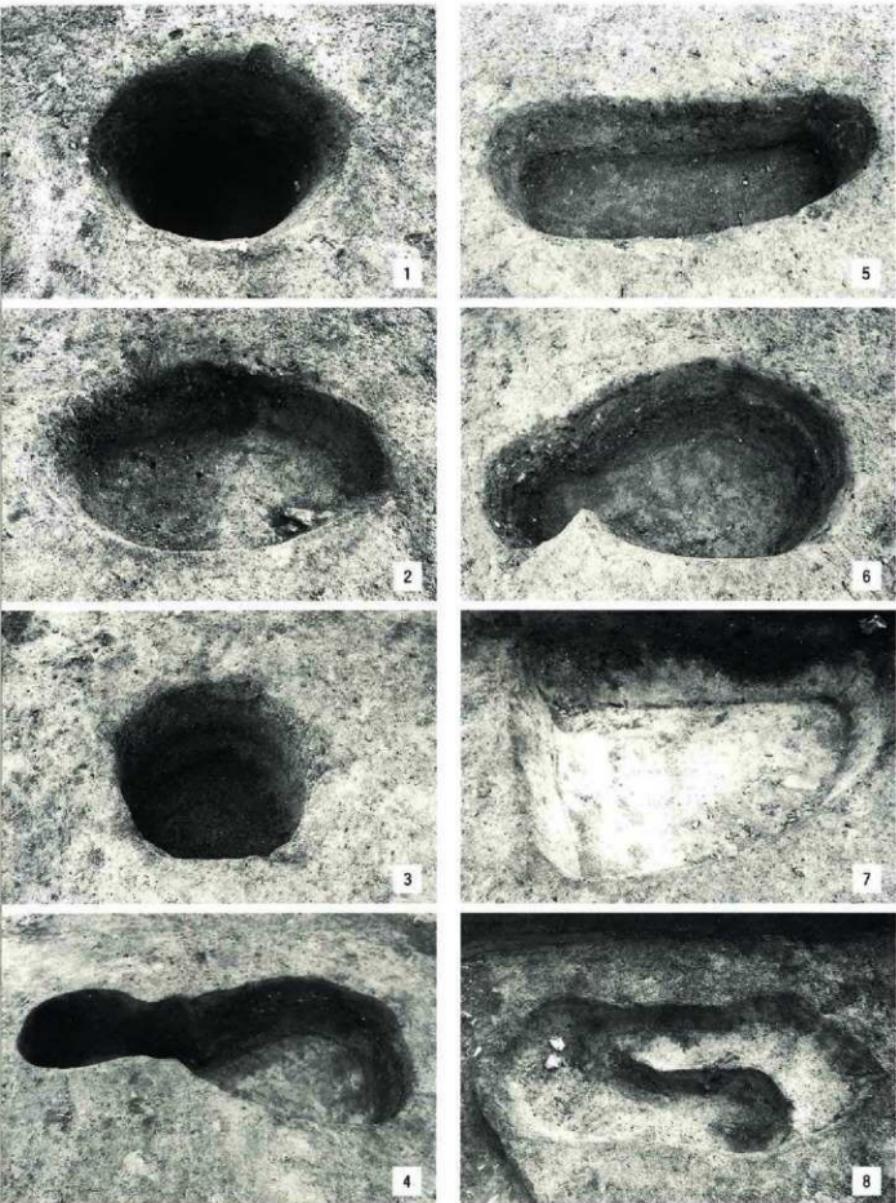


2

堤三本拂遺跡 2 区

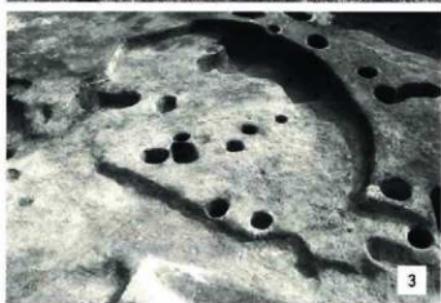
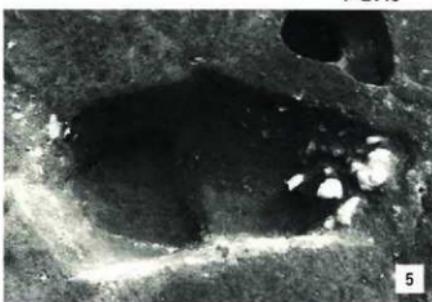
1. SB-008 (写真上方が北東)

2. SK-024A・B (南から)



堤三本柳遺跡 2 区

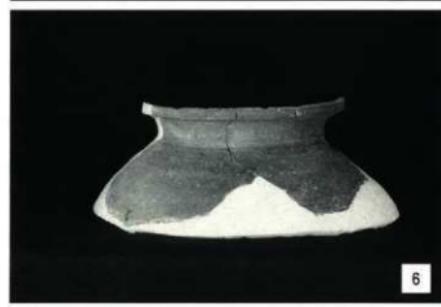
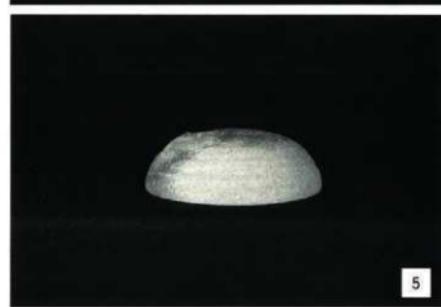
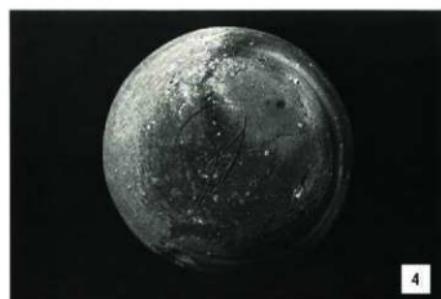
- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. SK-001 (北より) | 5. SK-005 (南西より) |
| 2. SK-002 (東より) | 6. SK-006 (南西より) |
| 3. SK-003 (南より) | 7. SK-007 (北西より) |
| 4. SK-004 (北より) | 8. SK-009 (北西より) |



堤三本柳遺跡 2 区

1. SK-012 (南西より)
2. SK-014 (北西より)
3. SK-015 (北より)
4. SK-016 (東より)

5. SK-018 (北より)
6. SK-019 (北東より)
7. SK-020 (東より)
8. SK-021 (東より)



堤三本柳遺跡 2 区

1. SK-022 (北より)
2. SK-023 (北西より)
3. SK-028 (南西より)

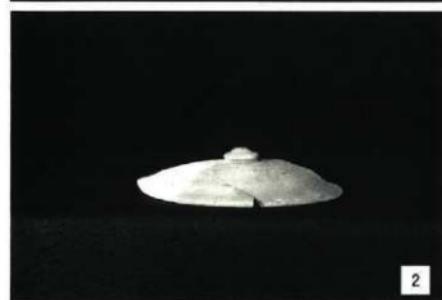
4. 1 SK-002出土
5. 1 SK-002出土
6. 3 SK-012出土
7. 4 ST-013出土



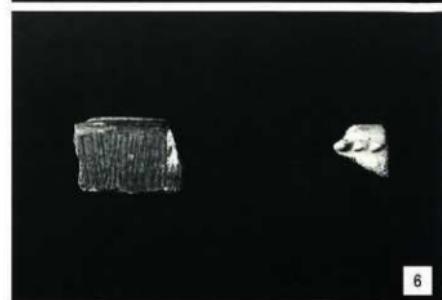
1



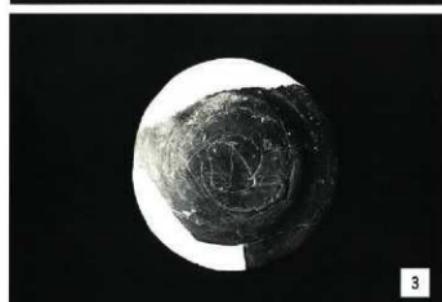
5



2



6



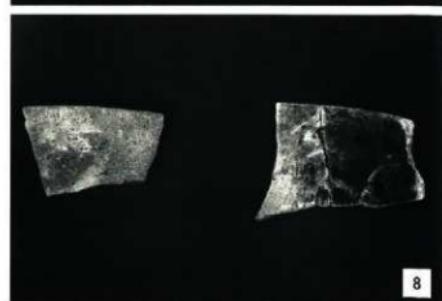
3



7



4

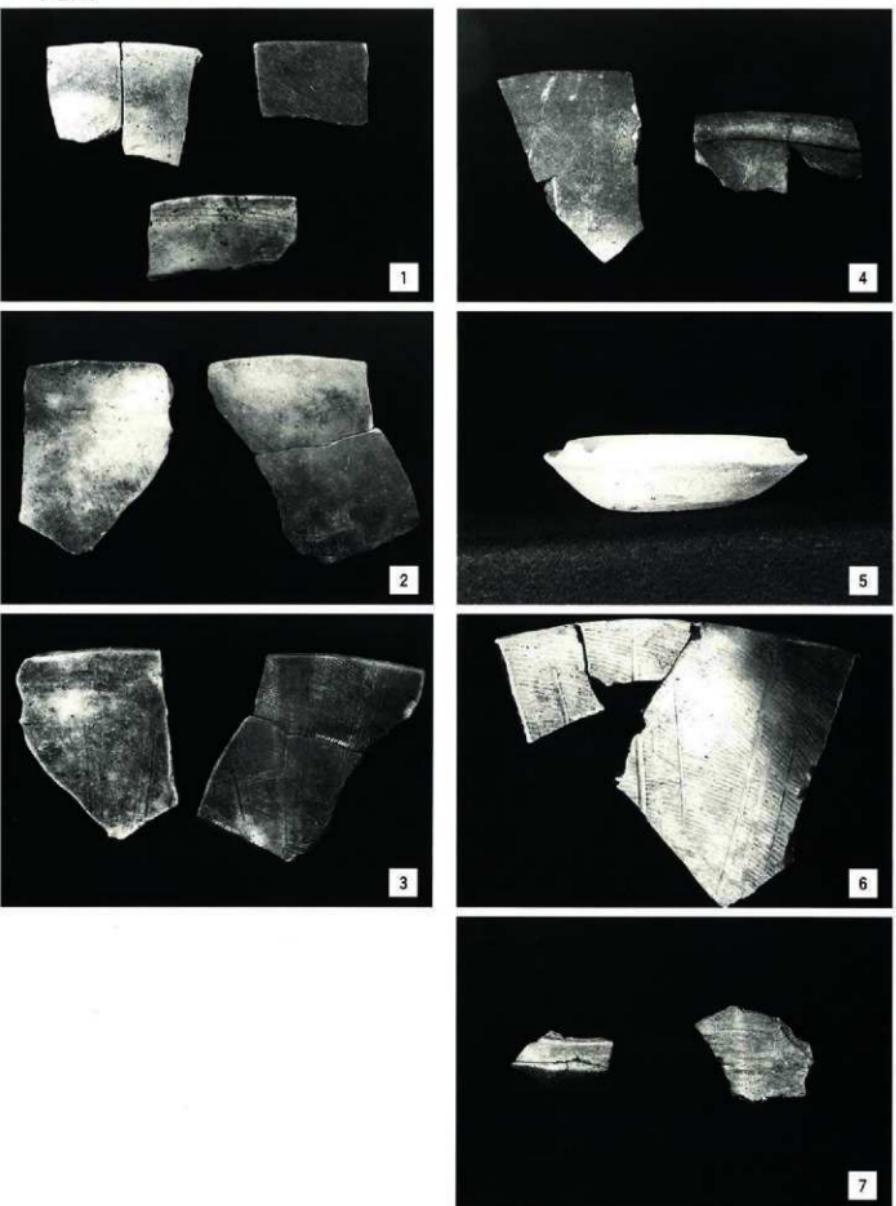


8

堤三本柳遺跡2区

1. 9 ST-013出土
2. 10 ST-013出土
3. 12 ST-013出土
4. 12 ST-013出土

5. 14 ST-013出土
6. 17・18 SK-014出土
7. 19 SK-019出土・22 SK-020出土
8. 20・21 SK-019出土



堤三本柳遺跡 2 区

1. 23・26・27 (下) SK-020出土
 2. 24・25 SK-020出土
 3. 24・25 SK-020出土

4. 30・31 SK-022出土
 5. 35 SK-024A出土
 6. 36 SK-024A出土
 7. 37・38 SK-024B出土

報告書抄録

ふりがな	つつみろっぽんだにいせきⅢ つつみさんほんまついせきⅠ つつみさんほんやなぎいせきⅠ						
書名	堤六本谷遺跡Ⅲ 堤三本松遺跡Ⅰ 堤三本柳遺跡Ⅰ						
副書名	平成7~9年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	上峰町文化財報告書						
シリーズ番号	第19集						
編著者名	原田 大介						
編集機関	上峰町教育委員会						
所在地	〒849-0123 佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4 上峰町民センター内 Tel./Fax0952-52-3833						
発行年月日	2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
堤六本谷遺跡	佐賀県三養基 郡上峰町大字 堤字一本柳	41345 3035 4005 5011	33°20'05" 130°25'16"	1995.4.17 1995.8.30	3,250m ²	農業基盤 整備事業	
堤三本松遺跡	佐賀県三養基 郡上峰町大字 堤字一本黒木	3012	33°21'13" 130°25'02"	1996.7.31 1996.12.3	625m ²	農業基盤 整備事業	
堤三本柳遺跡	佐賀県三養基 郡上峰町大字 堤字三本柳	1001 3006	33°21'13" 130°25'22"	1997.10.21 1998.2.5	1,875m ²	農業基盤 整備事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
堤六本谷遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代 中世	堅穴式住居址 掘立柱建物址 土壙	4軒 3棟 17基	弥生式土器 石器類 土師器・須恵器 中世土器		
堤三本松遺跡	散布地	奈良時代 中世	遺構なし		土師器片 中世土器片		
堤三本柳遺跡	集落跡 墳墓跡	绳文時代 古墳時代 奈良時代 中世	古墳 掘立柱建物址 土壙	1基 1棟 22基	绳文式土器 土師器・須恵器 中世土器		

上峰町文化財調査報告書第19集

**堤六本谷遺跡Ⅲ
堤三本松遺跡Ⅰ
堤三本柳遺跡Ⅰ**

平成13年3月20日 印刷

平成13年3月30日 発行

編集行
編集行

上峰町教育委員会

佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印刷

(株)昭和堂印刷 佐賀支店

佐賀県佐賀市高木瀬西4丁目12-1

